

住居・住環境のイメージと認知の形成過程に関する研究

千葉大学 寺門征男

目 次

はじめに

- 1 章 すまいの言葉とイメージ
 - 発達段階と地域性からの比較 —
- 2 章 いえ＝すまいのイメージ
 - 成長段階による変化・発展 —
- 3 章 家のイメージと拠点性の階層性
 - 年齢・家族内の役割から —
- 4 章 老壮年層の住居イメージと空間利用
 - 住み方にみるイメージの投影 —

はじめに

本調査研究は、望ましい住居並びに住環境に対する価値の形成、獲得のための基礎的な教養にかかわる居住者の主体的側面に焦点をあて、そのうち特に居住者の住居・住環境のイメージと認知の形成プロセスについて、発達段階あるいは人間の成長、地域性や居住特性の視点から検討を試みたものである。

これらの背景には、先に当研究会のメンバー等による「青少年の住環境意識に関する調査研究—小・中・高・大学生の発達段階による比較研究」において、住環境意識には発達段階と地域性によって固有の特性や大きな相異があることの知見をえた。そのさい意識の主体である居住者の主観的な住居イメージ及び認知の形成如何が新たな問題として検討課題となった。例えば、日常的には自分の住まいや住居のことを表現する場合、「家」とか「うち」とかの言葉を使用し共通予解をえているのが一般的であるが、この共通予解とされる内容やイメージというものが現実存在しているのか。子供にとっての「家」のイメージと大人のそれと、さらに老人にとってのイメージとには、何が共通し何が相違するのか、このイメージの形成、変化はどう展開されるのか、等が問題意識の発端であった。本調査研究は居住者の成長段階と地域性とのかわり住居・住環境にまつわるイメージと認知の内実と変化をとらえようとしたものである。

本調査研究を進めるなかで、これらのテーマに関連する先行的な調査研究あるいは方法論考等が意外に蓄積の

薄い領域であることを知った。これらの点をふまえ、本調査研究では、研究内容と方法上の全体統一的な研究枠組を設けず、あらかじめ若干の共通確認事項を設定するにとどめ、メインテーマに対し4つのグループがそれぞれのアプローチをとる方式を進めた。

確認事項として、イメージと認知の調査手法として、「周辺連想法—ことばの考現学的分析」(高田康孝「日本人の環境観」1978、『環境と文化』所収)を共通ベースとした面接調査採集法を採用した。イメージの形成過程に関しては発達段階又は成長過程、地域性や居住特性の視点をもうけること、特に幼児から老人までの視野のなかで居住者を位置づけ、又は特定の成長段階を対象とすること。地域性については、あらかじめ居住特性も考慮しある程度特性が明確な地域を設定することとし、ここでは大都市型密住地、地方都市型中間地、農山村型疎住地の3タイプをもうけ、7地区を対象地域とした。

本調査研究の構成は4章からなる。1章では、すまいの言葉からのイメージに関して、「家」「とり囲まれているもの」「環境」の3つのキーワードから住環境のイメージと認知について、〈小・中・高・大学生・成人〉の発達段階別と〈大都市型集合住宅地と戸建住宅地、地方都市型戸建住宅地〉の地域別とからの比較検討を中心に、あわせてメンタルマップ分析を加え居住環境の認知についても言及している。2章では、農山村型の豪雪山村の1つの定住地を対象として、先の3つのキーワードをベースに若干の改良を加え「いえ＝すまい」、いえ＝すまいの「取りかこむもの」、いえ＝すまいの「関心事」、いえ＝すまいの「理想」、「居住地環境」の5つの側面からイメージの構成と形成とを〈小・中・高校生・青年・壮年・老年〉の成長段階毎に、変化・発展について検討している。3章では、「家」「身近な地域」「取り囲んでいるもの」の3つをキーワードに、さらに「らくらくする・ほっとする場や時」を加え、家のイメージ構成とともに居住者の家のなかの拠点性について家族内役割や年令から検討し、それらの形成要因についても言及している。農山村型の農業+αを基盤としたスキー観光の居住地を対象におこなったもの。4章では、成長段階における老壮年層に着目し、家族及び家の経営、継承の主体層のもつ住イメージを具体的な住み方をとって検討し、それらのイ

メージと意識の形成と住空間への投影の仕組みについて言及している。農山村型の農業定住区を対象としたものである。本稿では、以上の流れにそって調査結果の概要を報告するものである。(寺門征男)

1 章 すまいの言葉とイメージ

一 発達段階と地域性からの比較一

1. はじめに

本章は住環境のイメージや認識の形成過程において、影響を受ける諸要因やそれら要因の相互関係を解明することによって、住環境の主観的認知構造を明らかにし、さらに日本人の住環境観モデルの概念枠組を構築するための基礎的資料を得ることを目的としている。

これらの目的に照らして本章で採用する方法は、K. リンチのいう「自由形式の自然主義的研究」の方法として、「ことば」と「メンタルマップ」の採集によって分析を行う。その際、主観的認知の構造をより明確にするために、

○小・中・高校生、大学生、成人の発達段階

○地域特性

の2つの軸を設けて、採集・分析していくこととした。本章における住環境観形成のメカニズムの枠組を、見田宗介の価値判断の規定要因の枠組「価値意識の理論」に準拠して考えていくことにする。

ここで住環境意識はまず第一に、社会構造や文化・風土の形象などの客観的要因に規定されており、さらに、これらの要因を反映している。

第二に、言語的、非言語的行為の中に、さらに行為の諸結果に反映していると考えられる。

そこで本章では、行為もしくはその諸結果から住環境意識を推論し、さらに住環境に対する認識を規定する要因の相互関係を解明していくことにする。

2. 調査の概要

(1) 対象地域

住環境意識に及ぼす居住地特性の影響をみるために、地域特性の異なる4地域を選定し、調査を実施した。

1. 木造密集地—木造密集地として、東京都世田谷区の東部に位置する、太子堂周辺。

2. 戸建住宅地—戸建住宅地として、東京都国立市の北東部に位置する、東、富士見台周辺。

3. 集合住宅地—集合住宅地として、横浜市の南東部に位置する磯子区洋光台、港南区野庭町。

4. 北陸地域—居住水準が高く、伝統的生活様式が残り、地理的にも日本海側の雪積地域にある黒部市。

(2) 発達段階

住環境意識の形成要因を明らかにするため本調査では、小・中・高校生、大学生、成人からデータを収集し、発達段階ごとの分析及び考察を行なっている。

(3) 調査時期及び調査対象者

各地域、対象者に対する調査実施期間は表I-1であり、調査対象者の概要は、表I-2である。

表I-1 調査実施期間

地 域	対 象 者	実 施 期 間
木 造 密 集 地	小 5	昭和58年9月中旬 ～昭和58年10月中旬
戸 建 住 宅 地	中 2	
集 合 住 宅 地	高 2	
北 陸	小・中・高 成 人	昭和59年6月初旬 ～昭和59年6月中旬
〃	大 学 生	昭和59年6月下旬 ～昭和59年7月初旬
首 都 圏	大 学 生 成 人	昭和59年7月初旬 ～昭和59年7月下旬

表I-2 調査対象者の概要

地域 男女別(人)	木造密集地域				戸建住宅地域				集合住宅地域				東 京			北 陸 地 域					合 計	
	小 5	中 2	高 2	小 計	小 5	中 2	高 2	小 計	小 5	中 2	高 2	小 計	大 学 生	成 人	小 計	小 5	中 2	高 2	大 学 生	成 人		小 計
男	16	15	1	32	18	15	14	47	15	15	7	37	16	12	28	14	9	5	14	11	53	197
女	21	18	6	45	10	17	18	45	15	15	14	44	10	12	22	14	8	15	18	12	67	223
合 計	37	33	7	77	28	32	32	92	30	30	21	81	26	24	50	28	17	20	32	23	120	420

3. 言葉の連想法による住環境イメージおよび認知の分析

3-1 反応語種数および反応頻度数からみたイメージの特徴

「家」「とり囲まれているもの」「環境」に対する反応にかかわるいくつかの指標を表I-3、-4、-5に発達

段階別・地域別にまとめて示す。

3-2 反応語全体からみた分析

「家」「とり囲まれているもの」「環境」からの反応語は膨大な数にのぼり、種類も多い。採集された言葉をいくつかの語の集合に分類し、カテゴリー化して分析する

表 I-3 「家」に対する反応語の各指標

指 標 項 目	定義式	小・中・高校生			
		木 造 密 集	戸 建 住宅地	集 合 住宅地	北 陸
反 応 語 種 数	W	40	52	52	36
累 積 反 応 頻 度 数	F	57	81	79	49
1 人 当 反 応 語 数	$w=W/S$	1.08	1.86	1.73	1.29
1 人 当 平 均 反 応 数	$m=F/S$	1.54	2.89	2.63	1.75
1 語 当 平 均 反 応 数	$f=F/W$	1.43	1.56	1.52	1.36
反 応 語 種 数	W	63	49	47	34
累 積 反 応 頻 度 数	F	123	80	67	56
1 人 当 反 応 語 数	$w=W/S$	1.97	1.69	1.62	2.00
1 人 当 平 均 反 応 数	$m=F/S$	3.84	2.75	2.31	3.29
1 語 当 平 均 反 応 数	$f=F/W$	1.95	1.63	1.43	1.65
反 応 語 種 数	W	20	166	48	30
累 積 反 応 頻 度 数	F	23	218	55	49
1 人 当 反 応 語 数	$w=W/S$	2.86	5.19	2.29	1.5
1 人 当 平 均 反 応 数	$m=F/S$	3.29	6.81	2.62	2.45
1 語 当 平 均 反 応 数	$f=F/W$	1.15	1.31	1.15	1.63
		首都圏 大学生	北 陸 大学生	首都圏 成 人	北 陸 成 人
反 応 語 種 数	W	91	127	70	68
累 積 反 応 頻 度 数	F	143	177	136	91
1 人 当 反 応 語 数	$w=W/S$	3.50	3.97	2.92	2.96
1 人 当 平 均 反 応 数	$m=F/S$	5.5	5.53	5.67	3.96
1 語 当 平 均 反 応 数	$f=F/W$	1.57	1.39	1.94	1.34

(但し、Sは被調査者数)

表 I-5 「環境」に対する反応語の各指標

指 標 項 目	定義式	小・中・高校生			
		木 造 密 集	戸 建 住宅地	集 合 住宅地	北 陸
反 応 語 種 数	W	43	40	40	27
累 積 反 応 頻 度 数	F	62	58	59	32
1 人 当 反 応 語 数	$w=W/S$	1.16	1.54	1.33	1.8
1 人 当 平 均 反 応 数	$m=F/S$	1.68	2.23	1.97	2.13
1 語 当 平 均 反 応 数	$f=F/W$	1.44	1.45	1.48	1.19
反 応 語 種 数	W	44	51	38	51
累 積 反 応 頻 度 数	F	92	92	52	74
1 人 当 反 応 語 数	$w=W/S$	1.42	1.70	1.58	3.00
1 人 当 平 均 反 応 数	$m=F/S$	2.97	3.07	2.17	4.35
1 語 当 平 均 反 応 数	$f=F/W$	2.09	1.80	1.37	1.55
反 応 語 種 数	W	31	152	55	50
累 積 反 応 頻 度 数	F	37	224	69	69
1 人 当 反 応 語 数	$w=W/S$	4.43	4.90	2.75	2.63
1 人 当 平 均 反 応 数	$m=F/S$	5.29	7.23	3.45	3.63
1 語 当 平 均 反 応 数	$f=F/W$	1.19	1.47	1.25	1.38
		首都圏 大学生	北 陸 大学生	首都圏 成 人	北 陸 成 人
反 応 語 種 数	W	96	161	89	73
累 積 反 応 頻 度 数	F	142	223	132	102
1 人 当 反 応 語 数	$w=W/S$	3.69	5.03	3.71	3.17
1 人 当 平 均 反 応 数	$m=F/S$	5.46	7.0	5.5	4.43
1 語 当 平 均 反 応 数	$f=F/W$	1.48	1.39	1.48	1.40

(但し、Sは被調査者数)

表 I-4 「とり囲まれているもの」に対する
反応語の各指標

指 標 項 目	定義式	小・中・高校生			
		木 造 密 集	戸 建 住宅地	集 合 住宅地	北 陸
反 応 語 種 数	W	52	38	59	31
累 積 反 応 頻 度 数	F	105	65	103	47
1 人 当 反 応 語 数	$w=W/S$	1.41	1.73	1.97	1.19
1 人 当 平 均 反 応 数	$m=F/S$	2.84	2.95	3.43	1.81
1 語 当 平 均 反 応 数	$f=F/W$	2.02	1.71	1.75	1.52
反 応 語 種 数	W	72	80	39	33
累 積 反 応 頻 度 数	F	147	130	79	63
1 人 当 反 応 語 数	$w=W/S$	2.32	2.50	1.63	1.94
1 語 当 平 均 反 応 数	$m=F/S$	4.74	4.06	3.29	3.71
1 語 当 平 均 反 応 数	$f=F/W$	2.04	1.63	2.03	1.91
反 応 語 種 数	W	28	176	76	27
累 積 反 応 頻 度 数	F	34	260	101	54
1 人 当 反 応 語 数	$w=W/S$	4.00	5.50	3.80	1.35
1 人 当 平 均 反 応 数	$m=F/S$	4.86	8.13	5.05	2.7
1 語 当 平 均 反 応 数	$f=F/W$	2.80	1.48	1.33	2.0
		首都圏 大学生	北 陸 大学生	首都圏 成 人	北 陸 成 人
反 応 語 種 数	W	58	131	69	63
累 積 反 応 頻 度 数	F	107	202	99	98
1 人 当 反 応 語 数	$w=W/S$	2.23	5.70	2.88	2.74
1 人 当 平 均 反 応 数	$m=F/S$	4.12	6.31	4.13	4.26
1 語 当 平 均 反 応 数	$f=F/W$	1.84	1.54	1.43	1.56

(但し、Sは被調査者数)

方法を用いることにする。

以上の手続きによって抽出されたカテゴリ別に発達段階、地域別のそれらの反応総頻度を求め、さらに、それぞれのカテゴリの反応頻度数を「家」「とり囲まれているもの」「環境」のイメージごとの発達段階、地域別の累積反応総頻度数で除し、それに100を乗じて、発達段階、地域別に「家」「とり囲まれているもの」「環境」の反応、それぞれに占める割合（重み）を分析のための指標値として用いている。

3-2-1 「家」のイメージ

「家」に対する反応語の累積反応頻度総数は1484語であった。一人平均3.57種の反応語だが、木造密集地の小学生が最も少なく1.08語、次いで、北陸の小学生の1.29語となっていて、大学生の一人当り反応語種数は最も多い。

地域別にみると、首都圏の木造密集地3.10語、戸建住宅地3.99語、集合住宅地3.11語、北陸2.33語となっている。

「家」ということばに反応した語は多種多様である。小学生では、具体的な「モノ」や「コト」などの名詞をあげている例が多いが、年齢が進むにつれて、単に名詞を羅列するだけではなく、文章記述によって「家」のイメージを表現する者がふえてくる。

表 I-6 に、各カテゴリの発達段階、地域別の反応

表 I-6 「家」から連想された言葉のカテゴリー化とその重み

カテゴリー	小・中・高校生					大 学 生		成 人	
	首都圏	木造密集地	戸建住宅地	集合住宅地	北 陸	首都圏	北 陸	首都圏	北 陸
家 族	14.2	10.0	13.6	19.6	18.4	16.7	18.6	17.7	9.9
団らん・楽しみ	12.9	11.4	14.6	11.3	24.3	21.7	19.7	30.2	23.1
生 活	10.9	11.4	8.0	15.7	12.5	6.5	6.0	9.4	6.6
家 庭	2.3	2.5	1.6	3.4	1.3	3.6	0.5	0	1.1
住 む (所)	6.9	9.5	6.1	5.9	7.9	0	1.1	2.1	2.2
家具・建築物	9.7	16.9	4.5	12.3	4.0	0.7	7.7	4.2	5.5
家具・電気製品	7.6	3.5	8.8	9.3	0.7	3.6	6.6	3.1	2.2
建築の構成材	6.0	8.0	6.6	2.9	4.0	13.0	5.5	3.1	1.1
部 屋	4.0	4.5	4.8	2.0	4.0	1.4	1.1	3.1	2.2
庭	5.9	8.5	6.6	2.0	4.0	9.4	5.5	5.2	6.6
形 容 詞	3.6	4.5	3.7	2.5	5.9	0	3.3	1.0	3.3
〇 〇 の 家	2.8	2.0	3.5	2.5	4.6	2.2	0	1.0	0
食 物	0.9	1.0	0.8	1.0	0	0.7	4.9	0	0
動 物	1.0	0.5	1.3	1.0	0.7	0	1.6	2.1	1.1
まわりの環境	2.4	0	4.0	2.0	0.7	2.2	2.7	2.1	2.2
家長制度	0.5	0.5	0.8	0	1.3	9.4	3.8	2.1	19.8
そ の 他	8.3	5.5	0.6	6.9	5.9	8.7	11.5	13.5	13.2
総 頻 度	781	201	376	204	152	138	183	96	91

頻度を示し、図 I-1 は首都圏と北陸の小・中・高校生の発達段階別に反応頻度を示している。

全体としてみると、反応語で最も多いのは〈団らん・楽しみ〉の254語であり、次いで〈家族〉の222語である。第1反応語では、〈住む所〉や〈家屋・建築物〉の頻度も高かったが、全体では、その傾向はみられない。

(1) 発達段階からみた「家」のイメージ

首都圏の小・中・高校生が「家」という言葉に反応した語のうち、最も多いのは〈家族〉であり、その「重み」は14.2であるが、北陸の場合は、〈団らん・楽しみ〉の語が高くなっている。さらに大学生、成人においては、〈団らん・楽しみ〉の語が多いが小・中・高校生の場合とは逆に、首都圏の大学生・成人の方が〈団らん・楽しみ〉の要素に対する「重み」は高い。全体的に「家」のイメージをみると、発達段階が進むにつれて、〈家族〉から「器としての住まい」の中の家族生活に重点が移っていくようである。

発達段階が進むにつれて「休息」や「暖かい」という言葉を含めた〈団らん・楽しみ〉をイメージしていく。中でも特に反応頻度が高かった語は、「ゆっくりできる」「安心する」のように精神的安定を表わす言葉である。家族は単なる個人の集まりではなく、「団らん」を通じて楽しみ、情報を交換し、育み合って互いの結合を深めていく。家庭生活の基盤ともいえる「団らん」は、それを行なうことのできる「家」があってこそ成立するものであり、「家」における「団らん」は家族生活にとって重要

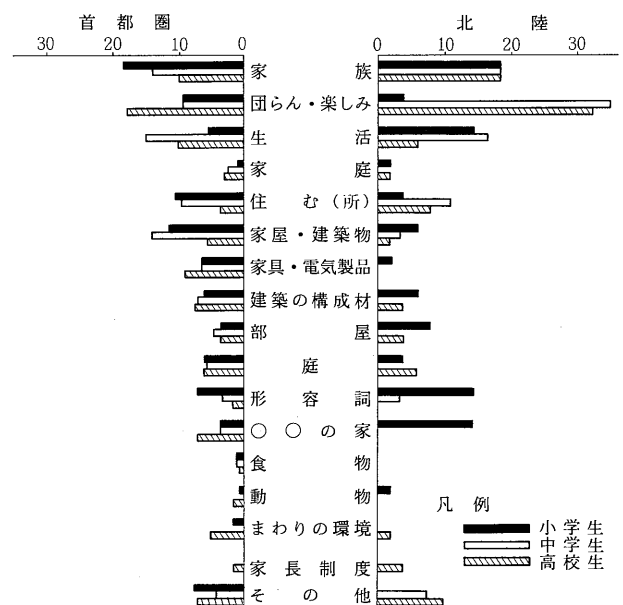


図 I-1 「家」から連想された言葉のカテゴリー化とその重み (小・中・高生の場合)

な意味をもたらしているものと思われる。

一方、首都圏の小・中学生に〈住む所〉や〈家屋・建築物〉への反応が多いが、高校生になるとその割合は減る。大学生・成人においては、非常に低い。

さらに年齢があがるほど、「家」を寝る所、食べる所などの「ねぐら」として捉える傾向が強い。「大小・新旧」のように、「家から」形容詞をイメージする者は、年令の

低い者に多く、小学生が、狭い・小さいという言葉に対してあげている。「楽しい」というイメージを「家」に対して持つ者は、発達段階が進むに従い減少していく。小学生では、「外にはない楽しいところ」、「仲が良い」といった言葉があげられており、家を肯定的に捉えているが、高校生では、「楽しい」という言葉の使用は、わずかにとどまっており、反面「束縛されている」という言葉をあげるなど、家に対し排他的な一面を持っていることがうかがえる。

(2) 地域性からみた「家」のイメージ

〈家族〉のカテゴリーでは、集合住宅地の者が19.6と最も高い割合を占めている。集合住宅地に居住する青少年にとって、家族の存在は家において重要な意味を持ち、「家」と「家族」との関連をより強く意識しているといえよう。

〈団らん・楽しみ〉のカテゴリーでは、北陸の者が24.3と最も高い重みを占めている。

〈家屋・建築物〉〈住む所〉のカテゴリーでは、地域格差が顕著に現われており、木造密集地では両方あわせて26.4の重みで、「一戸建」、「団地」、「住む所」等のことばをあげているのに対し、戸建住宅地では10.6にすぎない。木造密集地では、居住形態を示す言葉が多くあげられて

おり、「一戸建」、「アパート」、「団地」、「マンション」など多種に及び、中でも「一戸建」が最も多い。戸建住宅地で、居住形態に関してあげられた言葉は、すべて「一戸建」であり、集合住宅地では「団地」が最も多いことから、居住地の住宅の特性が、連想する言葉の中に明白に表われているといえよう。

3-2-2 「環境」のイメージ

「環境」に対する累積反応頻度総数は1418語で3つのことばの中では最も低い。一人当たり平均反応頻度数は3.60語で、「家」に比べて少し多い。これは小・中学生に反応できない子どもが多かったことによる。特に、北陸の小学生28人中、13人がイメージをもっていない。

一人当たり反応語数でみると、小学生は全体的に少ない傾向にあるが、特に木造密集地の小学生1.16語、中学生1.42語で反応イメージ量は少ない。発達段階が進むにつれて、反応語数は増える傾向にあるが、全体的にみると地域差は明確でない。

表I-7には、各カテゴリーの発達段階、地域別の反応頻度を示している。ここでは、〈自然・土地の要素〉が最も多く233語で、次いで、〈環境の評価〉130語、〈緑〉129語、〈自然〉125語、〈公害〉と〈汚染・騒音など〉で120語となっている。

表I-7 「環境」から連想された言葉のカテゴリー化とその重み

カテゴリー	小・中・高校生					大 学 生		成 人	
	首都圏	木造密集地	戸建住宅地	集合住宅地	北 陸	首都圏	北 陸	首都圏	北 陸
自 然	8.5	9.2	7.6	9.4	11.5	6.4	8.7	5.6	7.8
緑	11.1	15.1	10.1	8.9	5.2	8.5	4.1	9.5	5.9
自然・土地の要素	14.2	15.1	17.9	5.6	21.3	10.7	12.8	16.7	27.5
気 象 ・ 天 空	4.6	3.2	5.7	3.9	4.0	6.4	3.7	4.8	2.0
公 害	1.2	2.7	5.4	2.2	1.7	8.5	2.3	4.0	2.0
汚 染 ・ 騒 音 など	5.5	9.2	5.4	1.7	4.0	6.4	1.8	4.0	2.0
破 壊 ・ 保 護	2.2	0	3.0	2.8	3.4	3.6	1.4	2.4	0
交 通 関 係	2.9	3.2	2.2	3.9	3.4	3.6	2.3	5.6	2.0
道 路 と そ の 状 況	2.2	2.7	3.0	0	2.3	3.6	3.2	3.2	2.0
立 地	3.5	5.9	2.2	3.9	2.9	3.6	10.1	1.6	8.8
生 活 関 連 施 設	5.0	4.3	4.6	6.7	2.9	6.4	6.4	8.7	5.9
住 建 築 物	2.0	4.3	1.4	1.1	0	1.4	0.9	0.8	0
景 色 ・ 風 景	0.8	0	1.1	1.1	1.7	0	1.8	1.6	2.9
環 境 の 評 価	8.9	8.1	7.3	12.8	13.8	2.9	7.3	14.3	2.9
家・家庭・くらし	6.5	6.5	5.2	9.4	5.2	2.9	5.5	3.2	2.0
家 族	1.8	0.5	1.4	3.9	2.9	1.4	3.7	0.8	4.9
近 隣 ・ 人 間	4.9	5.4	3.8	6.7	4.6	5.7	9.2	1.6	7.8
人 間 形 成 ・ 影 響	2.0	0.5	2.2	3.3	0	5.7	6.0	3.2	4.9
ま わ り	4.1	1.6	4.1	6.7	7.5	2.9	5.5	0.8	3.9
特 定 の 言 葉	1.6	0.5	2.4	1.1	0	5.0	1.8	1.6	0
そ の 他	3.7	1.6	4.1	5.0	1.7	4.3	1.4	6.3	4.9
総 頻 度	733	185	368	180	174	140	218	126	102

(1) 発達段階からみた「環境」のイメージ

首都圏の小・中・高校生が「環境」ということばに反応した語のうち、最も多いのは〈自然・土地のエLEMENT〉であり、その頻度数は104語で重み14.2である。北陸も同じ傾向を示している。これを発達段階別にみていくと、首都圏では小学生は、重み10.0以上をみると〈自然・土地のエLEMENT〉〈環境の評価〉〈家・家庭・くらし〉〈緑〉の順に反応しており、中学生は〈緑〉〈自然〉〈自然・土地のエLEMENT〉〈家・家庭・くらし〉、高校生は〈近隣・人間〉〈自然・土地のエLEMENT〉の順である。高校生が重み10.0以上の要素が少ないのは、反応が全カテゴリーに分散していないからといえる。

一方、北陸では、小学生は〈環境の評価〉〈自然・土地のエLEMENT〉、中学生は〈自然・土地のエLEMENT〉〈自然〉、高校生も同じく〈自然・土地のエLEMENT〉〈自然〉の順に反応している。〈自然〉といった抽象的な名詞を反応語としてあげる者が少なく、山、川、木、草木などのエLEMENTをあげる傾向が強い中で、北陸の小学生は「環境」ということばに対応してイメージ出来ない者が28人中13人も占めており、「良い、のどか、美しい」といった環境を良く評価する語が多くあげられていた点は注目すべきであろう。

逆に首都圏に居住している高校生は北陸の高校生がほとんど反応していないのに、「公害」にかかわる要素、〈公害〉〈汚染・騒音など〉〈破壊・保護〉の重みが14.7と高い割合を示している。さらに首都圏の高校生では、〈特定の言葉〉すなわち「環境庁、アセスメント」といった語をイメージしているものも目立つ。

〈汚染・騒音など〉については、首都圏の小学生も高い反応を示している。小学生では、「空気の汚れ」「ドブ川」「ゴミ」などの身近にある具体的なコトをイメージしている者が多い。

〈近隣・人間〉のカテゴリーでは高校生が多く反応している。その内容として、「家族」をはじめとして様々な人間の存在と、生活行動圏の拡大にともなう認識の対象があげられている。

一方、小・中学生は身近なものからイメージすることが多く、それは〈家・家庭・くらし〉のカテゴリーの重みの高さに表われているといえよう。

以上の分析により、首都圏では、小学生はより具体的なもの、身のまわりにあるものを中心として環境をとらえ、その中で、遊び場や家庭などの日常生活を反映し、周囲を感覚的に表現する。中学生では、小学生よりとらえ方が抽象化し、周囲の建物や状況を物理的に表現することで、環境をとらえる者が多くなるようである。高校生では、抽象化が進み、利便性を注目しはじめ、人間関係や社会事象にまで、幅広く環境をとらえているようである。大学生に特徴的な点は、「環境」が〈人間形成〉に

大きな影響を与えるという認識をしていることである。

(2) 地域性からみた「環境」のイメージ

1) 木造密集地

居住地に存在しない〈緑〉や山・森・海・田などといった〈自然・土地のエLEMENT〉への憧れがイメージされている。さらに、排気ガスや光化学スモッグなどの大気汚染によってむしばまれている環境をイメージし、現状の悪い影響をあげている。

2) 戸建住宅地

自宅のまわりの草花・植木から、山・川・海などの身近にない〈自然・土地のエLEMENT〉に関連する語をあげており、「環境」を広範囲にイメージしている。

3) 集合住宅地

「自然」にかかわる要素、〈自然〉〈緑〉〈自然・土地のエLEMENT〉へのイメージが他地域より少なく、〈環境の評価〉が高くなっている。これは、この地域がいわゆる計画的につくられた街であるために「自然」にかかわる要素が青少年の身近にないことが原因となっていると思われる。したがって「子どものためによい」「交通の便が悪い」などといった〈環境の評価〉をイメージし、さらに居住地間にある公園、プール、環境管理事務所などをイメージしているのは注目すべきである。

4) 北陸

この地域の人は小学生から成人まで、〈自然・土地のエLEMENT〉の要素に多く反応し、あたりまえの存在である〈緑〉のイメージは少ない。また、この地域の大学生と成人は、郊外、田舎といった〈立地〉にかかわる要素に反応する者も多いのも特徴的である。

5) 首都圏

この地域に住む大学生・成人は〈緑〉に対する反応が北陸の者より高い。これは小・中・高校生の場合と同様、ないものに対する憧れと、〈自然〉という抽象的な概念より、一般的には本人に好まれる具体的なエLEMENTを包括的にイメージする語として〈緑〉への反応が高くなっていると思われる。

3-2-3 「とり囲まれているもの」のイメージ

「とり囲まれているもの」に対する累積反応頻度数は1694語で、一人当たり平均反応頻度数は4.18であり、発達段階が進むにしたがって増えていく傾向にある。

一人当たり反応語数でみると、北陸の小学生が最も少なく1.19語であり、次いで北陸の高校生の1.35語である。成人においては地域差は少ない。木造密集地の小学生の一人当たり反応語数も1.41と少ないが中学生は戸建住宅地と大差がない。全体的にみると、発達段階差はみられても、地域差は明確でない。表I-8に、各カテゴリーの発達段階、地域別の反応頻度を示している。反応語で最も多いのは〈家族・きょうだい〉の264語で、次いで〈友人・仲間・近隣〉の183語、〈自然・土地のエLEMENT〉

表 I-8 「とり囲まれているもの」から連想された言葉のカテゴリー化とその重み

カテゴリー	小・中・高校生					大 学 生		成 人	
	首都圏	木造密集地	戸建住宅地	集合住宅地	北 陸	首都圏	北 陸	首都圏	北 陸
自 然 ・ 緑	3.3	2.8	3.1	4.4	8.7	9.6	10.6	8.3	7.0
自然・土地のエレメント	8.2	6.5	6.6	12.9	16.8	1.0	14.5	13.8	24.0
気 象 ・ 天 空	4.3	4.3	5.4	2.6	3.7	2.9	3.9	10.1	0
公 害 ・ 汚 染 など	3.0	3.1	3.8	1.8	0	7.7	0	6.4	1.0
交 通 ・ 道 ・ 危 険	2.9	2.5	3.5	2.6	2.5	13.5	5.3	4.6	1.0
立 地 ・ 施 設 ・ 建 物	6.7	9.9	4.0	7.0	7.5	6.7	9.2	2.8	2.0
家とその一部・材料	6.4	10.8	4.7	3.7	1.9	1.0	2.9	1.8	0
家族・きょうだい	17.6	26.6	13.6	13.2	21.1	8.7	4.8	13.8	16.0
友人・仲間・近隣	9.1	8.7	10.4	7.7	16.1	8.7	12.1	11.9	17.0
人間・人間関係	5.4	3.1	4.7	9.2	3.1	14.4	9.2	4.6	2.0
愛情・友情・信頼	0.6	0	1.4	0	0	1.9	0	3.7	0
学 校 ・ 勉 強 ・ 塾	4.9	3.1	5.2	6.6	10.6	4.8	2.4	0	1.0
家 庭 ・ 生 活	1.7	1.2	2.4	1.1	1.2	1.0	0	2.8	0
生 活 用 品	8.7	5.9	10.8	8.8	2.5	1.9	3.9	0	2.0
食 品	2.5	2.8	3.3	0.7	1.2	1.0	1.9	0	0
情 報 ・ 音 楽 ・ 本	6.9	5.0	9.2	5.5	0.6	1.0	4.8	5.5	6.0
社会・世間・しつけ	0.5	0.3	0	1.5	0	5.8	2.9	2.8	3.0
歴 史 ・ 文 化 ・ 祖 先	0.8	0	1.9	0	0	1.9	0	1.8	0
雰 囲 気 ・ 感 情	3.7	1.5	3.3	7.0	1.2	1.9	9.2	0	5.0
仕 事 ・ 組 織	0	0	0	0	0	0	0	1.8	9.0
そ の 他	2.7	1.9	2.8	3.7	1.2	4.8	2.4	3.7	4.0
総 頻 度	1020	323	425	272	161	104	207	109	100

181語、〈立地・施設・建物〉111語、〈生活用品〉105語、〈人間・人間関係〉101語の順である。「人間にかかわる」要素が比較的多く反応されている。

発達段階でみていくと、小・中・高校生および成人は〈家族・きょうだい〉に重みがあり、大学生は〈友人・仲間・近隣〉や〈人間・人間関係〉に重みがある。

首都圏、北陸ともに小・中・高校生の全体でみると、「とり囲まれているもの」ということばに反応した語のうち、最も多いのは〈家族・きょうだい〉であるが、発達段階別に詳細にみていくと、イメージの差がみられる。

小学生では、首都圏、北陸ともに〈家族・きょうだい〉の要素への反応が多いが、北陸の小学生では、それと同じ意味の29.5の反応を〈自然・土地のエレメント〉に示している。しかし首都圏の小学生は〈友人・仲間〉〈自然・土地のエレメント〉〈立地・施設・建物〉〈生活用品〉へと反応が分散している。

中学生については、首都圏では反応が種々のカテゴリーに分散し、〈家族・きょうだい〉の重みが13.7と低い。それに比べて北陸の中学生は〈友人・仲間・近隣〉の重みが23.8と最も高く、次いで〈家族・きょうだい〉との反応となって表われている。なお、両地域の中学生は〈学校・勉強・塾〉をイメージしている割合が高いことは興

味ある。同様に高校生においても、両地域とも、比較的高い重みを示している。

首都圏の高校生に最も高い反応を示しているのは机、木棚、台所用品などの〈生活用品〉で、次いで、電話、テレビ、音楽、音などの〈情報・音楽・本〉に囲まれているとイメージしている。この反応は、現代の若者の情報型人間の姿をうかびあがらせている。この首都圏の高校生とは対照的に、北陸の高校生は〈自然・土地のエレメント〉に高い反応を示し、次いで〈家族・きょうだい〉〈友人・仲間・近隣〉となっている。首都圏の大学生では、〈家族・きょうだい〉といった身近な「人間にかかわる」要素より、抽象化された〈人間・人間関係〉に14.4という高い割合を占め、次いで、他のものが低い反応を示している〈交通・道・危険〉に13.5という反応を示している。一方、北陸の大学生は〈自然・土地のエレメント〉に14.5という高い反応を示し、次いで〈友人・仲間・近隣〉、〈自然・緑〉の順に反応している。成人についてみると、「人間にかかわる」要素と「自然にかかわる」要素に首都圏、北陸のいずれも反応しているが、北陸の成人の〈仕事・組織〉に対する反応の高い点は注目すべきである。

4. メンタル・マップによる認識の分析

居住地が学区毎にまとまっている、小・中・高校生を対象に、メンタルマップを描かせ、彼らが居住している地域をどのように認識しているか、分析を試みた。

ここでは、描かれた地図の型・面積による分析から得られた5つの型を用いて、小・中・高校生の地域の認識構造の概要を示す。

- A. 自宅周辺型——自宅付近のごく限られた範囲を描いたもの。自宅周辺の一軒一軒の家、家や建物の名称等、細かく書き込まれたものが多い。
- B. 分散型——自宅や他の要素を分散させ、位置関係は判断できるが、道路による連結が非常に乏しいもの。
- C. 道路中心型——自宅付近と学校、駅等の目標物とを道路によって、つないでいるもの。
- D. 自宅付近の区域一帯型——自宅付近から町の区域が構成されているもの。道路、川等で外周を囲んでいるものが多い。
- E. 地域一帯型——居住区域と他の区域とともに構成されているもの。描かれた要素も、目立つもの、一般によく知られているものも多く、大まかな図が多い。中には、他の地域まで延長され、範囲が非常に広いものもある。

これらを型別に分類したのを図1-2に示す。

自宅周辺	分散	道路中心	自宅付近の区域一帯	地域一帯

図1-2 メンタルマップの型による分類

また、面積は、1万分の1のそれぞれの地図に、描かれた地図を写し、プランメータを用いて、各々の面積を測定した。

(1) 発達段階

図1-3に示すように「自宅付近」型、「分散」型、「道路中心」型は、発達段階が低い程多くなっている。「道路中心」型においては、地域内に学校のある小・中学生は、「通学路」を中心としたものが多いが、高校生は、電車通学となるために、「駅」までの経路を表現した者が多い。

	自宅付近	分散	道路中心	自宅付近の区域一帯	地域一帯
小学生	53.7	4.1	13.0	22.8	6.4
中学生	34.8	5.4	35.7	21.4	
高校生	13.7	11.3	37.5	35.0	

図1-3 メンタルマップの型による分類
(発達段階による比較)

「自宅付近の区域一帯」型、「地域一帯」型は、発達段階が進むに従って増加する。「地域一帯」からさらに外部へと拡がりをもつ者も、中・高生に数名ずつ存在するが、特に高校生の中には、駅を3～4箇所描き、線路でつなぐ表現をしている者がみられる。

描かれた地図の面積は、発達段階が進むに従って大きくなっている。

(2) 地域性

1) 木造密集地

地図に描かれた面積の、この地域全体の平均は、14.8haと他地域に比べ、最も小さい。

また、図1-4に示すように、他地域に比べ、「自宅周辺」型が最も多くみられる。

	自宅付近	分散	道路中心	自宅付近の区域一帯	地域一帯
木造密集地	53.2	18.2	13.0	15.6	
戸建住宅地	25.0	6.5	45.7	22.8	
集合住宅地	32.1	12.3	6.2	38.3	11.1
北陸	40.9	9.1	22.7	27.3	

図1-4 メンタルマップの型による分類
(地域による比較)

前述したように、この地域の外周は、主要道路によって明確になっているが、その内部は、道路が迷路のように入り組み、非常に把握しにくいものとなっている。したがって、描かれた地図は、面積が非常に小さく、自分のよく知っている、「自宅周辺」のみを描く傾向にあると考えられる。

2) 戸建住宅地

地図に描かれた面積のこの地域全体の平均は、45.9haと北陸に次いで大きなものとなっている。特に小学生は、他地域に比べ、最も大きな値となっている。

表1-9に示すように、「自宅付近の区域一帯」型が、どの学年においても、他地域に比べ最も多くなっている。

3) 集合住宅地

地図に描かれた面積のこの地域全体の平均は、23.4haであり、どちらかというと小さい方である。発達段階が進むにしたがって、大きくなっていくのが一般的であるが、この地域においては、小学生よりも、中学生の方が小さくなっている。

図1-4に示すように、他地域にはみられない、「分散」型が12.3%みられ、「地域一帯」型は、最も少なくなっている。

4) 北陸

地図に描かれた面積のこの地域全体の平均は、82.2haと他地域に比べ、最も大きい値となっている。小学生は、

表I-9 地図に描かれた要素

	木造過密地域				戸建住宅地域				集合住宅地域				北陸地域				合計
	小5	中2	高2	小計	小5	中2	高2	小計	小5	中2	高2	小計	小5	中2	高2	小計	
道	369 9.97	405 11.91	142 20.29	916 11.74	229 8.18	351 10.97	271 8.47	851 9.25	254 8.47	229 7.63	203 10.15	686 8.56	283 10.11	217 12.76	237 13.65	737 11.34	3,190 10.13
駅・バス停	5 0.14	14 0.14	9 1.29	28 0.36	12 0.43	18 0.56	47 1.47	77 0.84	9 0.30	17 0.57	21 1.05	47 0.59	1 0.04	23 1.35	17 0.85	41 0.63	193 0.61
鉄 道	0 0.00	2 0.06	0 0.00	2 0.03	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	1 0.05	1 0.01	2 0.08	16 0.94	14 0.70	32 0.49	35 0.11
家	集 合	91 2.46	65 1.91	174 2.23	63 2.25	149 4.66	73 2.28	285 3.10	459 15.30	407 13.57	259 12.95	1,125 14.06	4 0.16	13 0.76	2 0.10	19 0.29	1,603 5.09
	その他	530 14.32	274 8.06	95 13.57	899 11.53	233 8.32	376 11.47	364 11.38	68 10.58	122 4.07	55 2.75	245 3.06	574 20.05	116 6.82	259 12.95	949 14.60	3,066 9.73
	計	621 16.78	339 9.97	113 16.14	1,073 13.76	296 10.57	525 16.41	437 13.66	1,258 17.57	529 17.63	314 15.70	1,370 17.13	578 20.64	129 7.59	261 13.05	968 14.89	4,669 14.82
商 店	274 7.41	435 12.79	99 14.14	808 10.36	167 5.96	218 6.81	310 9.69	695 7.55	89 2.97	43 1.43	148 7.40	280 3.50	66 2.35	117 6.88	148 7.40	331 5.09	2,114 6.71
工 場	0 0.00	2 0.06	1 0.14	3 0.04	1 0.03	0 0.00	2 0.06	3 0.03	0 0.00	0 0.00	2 0.10	2 0.03	11 0.39	8 0.47	5 0.25	24 0.37	32 0.10
学 校	40 1.08	21 0.62	25 3.57	86 0.87	73 2.61	88 2.75	79 2.47	240 2.61	44 1.47	69 2.30	52 2.60	165 2.06	11 0.39	31 1.82	32 1.60	74 1.14	565 1.79
公 共 施 設	13 0.35	21 0.62	11 1.57	45 0.58	8 0.28	14 0.44	39 1.22	61 0.66	18 0.60	27 0.90	28 1.40	73 0.91	18 0.64	45 2.64	33 1.65	96 1.48	275 0.87
公園・広場	37 1.00	17 0.50	7 1.00	61 0.78	18 0.62	22 0.69	33 1.03	73 0.79	62 2.07	46 1.53	135 1.35	135 1.69	3 0.11	9 0.53	5 0.25	17 0.26	286 1.10
寺・神社	5 0.14	18 0.53	4 0.57	27 0.35	1 0.03	1 0.03	2 0.06	4 0.04	1 0.03	0 0.00	1 0.05	2 0.03	6 0.22	6 0.35	19 0.95	31 0.48	64 0.20
駐 車 場	23 0.62	40 1.18	3 0.43	66 0.85	9 0.32	17 0.53	12 0.38	38 0.41	15 0.58	27 0.90	19 0.95	61 0.76	8 0.29	5 0.29	2 0.10	15 0.23	180 0.57
川	5 0.14	2 0.06	0 0.00	7 0.09	0 0.00	0 0.00	8 0.25	8 0.09	0 0.00	1 0.03	5 0.25	6 0.08	19 0.68	10 0.59	12 0.60	41 0.63	62 0.20
自然・畑	2 0.05	0 0.00	0 0.00	2 0.03	1 0.03	18 0.88	33 1.03	52 0.57	4 0.13	4 0.13	17 0.85	22 0.26	48 1.71	15 0.88	34 1.70	97 1.49	173 0.55

(上段: 総数, 下段: 1人当りの個数)

他地域に比べそれ程大きいとは言えないが、中・高校生は、他地域の2～9倍の大きさとなっている。また、平均の面積において中学生の方が、高校生よりも、大きくなっている。

図I-4に示すように、「地域一帯」型は、他地域に比べ最も多くなっているが、その一方で、「自宅周辺」型も、木造密集地に次いで多くなっている。(小澤紀美子, 渡辺彩子, 佐伯とよ子, 野村緑子)

2章 いえ=すまいのイメージ

一 成長段階による変化・発展一

はじめに

本章は、ある特定地域において、そこに定住する人々が、*「いえ=すまい」*に対してどのようなイメージや住居観又は居住観をもち、世代(成長段階)別にみると、それらがどのように変化・発展するのか、を主題に調査研究を試みたものである。ここでは調査結果の概要を中心に報告するものである。なお全体的な分析と考察は、別稿の全体報告書で詳しく論じている。

1 調査の概要

(1) 調査地の概要

松代町は新潟県南西部の東頸城郡に位置する標高200

M～600Mの豪雪山村で、人口7,114人(S. 55国調)、世帯数1,967、39ヶの集落が丘陵山地に点在する町である。59年冬の豪雪は5Mを越え5月初旬で約2M以上の根雪があった。住居は耐雪家屋といわれる棟高の上越型中門造りを基調とするものが多い。また鈴木牧之の「北越雪譜」の松代・松之山郷にみられる地でもある。本研究全体の対象地域のうち、住環境の急激かつ大きな変化が比較的ゆるやかで、かつ最も自然環境とのかかわりの深い地域である。

(2) 調査方法と内容の概要

周辺連想法による「家」「取りかこむもの」「環境」というキーワードを主軸に、これらの言葉(刺激語)からの連想語(反応語)を採集記述する面接調査法により、現地で世代別合計90人を対象にヒヤリングを実施した。調査内容は次のとおりである。

〈一般的にもつ住居イメージについて〉—「いえ=すまい」という言葉から何を思いうかべるか(Q1)。

〈具体的な住居環境の認識とイメージ構成について〉—自分が住んでいる「いえ=すまい」は何に「取りかこまれている」と思うか(Q2)。

〈住居に対してもつ主要な関心の対象の所在について〉—自分が住んでいる「いえ=すまい」の(1)よい点・よい所、(2)悪い点・悪い所は何か(Q3)。

〈理想とする住居と環境のイメージについて〉—自分が

自由に「いえ＝すまい」を持てるとしたら(1)どんな「いえ＝すまい」を、(2)どんな「場所・環境」に持ちたいか(Q4)。

〈居住地環境のもつイメージやシンボルについて〉—自分の住んでいる集落・部落から何を思いうかべるか(Q5)。

〈住居の形象イメージについて〉—Q1を図柄として描くとどんな表現(図)になるか(Q6)。

以上が面接事項で〈〉は分析の軸組である。Q6以外は面接者が被調査者の反応語を記述し、反応語数には特に制限を設けていない。Q6のみは被調査者本人が描く方式である。本調査では、キーワードの「家」「取りかこむもの」「環境」を、松代町の地域性並びに各世代に共通しうる言葉を考慮し次のように置き変えた。「家」を「いえ＝すまい」、「取りかこむもの」を「いえ＝すまいを取りかこむもの」、「環境」を「住んでいる集落・部落」、へとそれぞれ変えて調査している。

表2-1 世代(成長段階)別被調査者数

世代		小学生 (5.6年)		中学生		高校生		青年 (20~29才)		壮年 (30~54才)		老年 (55才以上)	
対象者数	男	18	14	26	15	12	6	9	8	9	6	16	11
	女	4		11		6		1		3			5

2 調査結果の概要

2-1 反応語種数, 反応頻度数

Q.1からQ.5の反応語数, 反応頻度は表2-2の如くである。反応語種数の最も多いのは、Q.5で、累積反応頻度数も最も高い。松代町における反応語にみる特長は、1人当反応語数の多いのがQ.5(居住地環境のイメージ)、次いでQ.2(取りかこむもののイメージ)、Q.1(いえ＝すまいのイメージ)の順となり当地域の居住地環境のイメージやシンボルの豊富さを示す。1人当平均反応数では、Q.2(取りかこむもの)が最も多く、次いでQ.5、Q.1の順で、特に、いえ＝すまいを取りかこむものと居住地環境とに対する関心の度合いの強さがみられる。1語当平均反応数は、Q.2が多く、取りかこむものの認知とイメージにおいて、その共有性の高いことを示している。

2-2 反応語の分析とカテゴリー化

表2-2の通り、各設問とも反応語数及び頻度数が膨大である。そこで反応語種(口答の言葉)は違うが、その意味、内容を同じくするものを類別化し幾つかのカテゴリーに整理し、その指標によりイメージ構成をみることにしている。例えば、いえ＝すまいのイメージ(Q.1)

表2-2

設問		Q.1	Q.2	Q.3 -(1)	Q.3 -(2)	Q.4 -(1)	Q.4 -(2)	Q.5
S: 90人								
反応語種数	W	140	103	121	89	107	82	198
累積反応頻度数	F	190	217	170	124	138	139	239
1人当 反応語数	$w = \frac{W}{S}$	1.56	1.14	1.34	0.99	1.19	0.91	2.20
1人当 平均反応数	$m = \frac{F}{S}$	2.14	2.41	1.89	1.38	1.53	1.54	2.26
1語当 平均反応数	$f = \frac{F}{W}$	1.38	2.11	1.41	1.39	1.29	1.70	1.21

は反応語数140, 累積反応頻度数190であるが、頻度2以上の反応語を類別すると、17のカテゴリーにわけることが出来る。

ちなみに17のカテゴリーと重みづけは、「家族(16.1)」「家族関係(10.9)」「心象(10.9)」「家族行為(8.3)」「生活(7.8)」「住む所(6.7)」「家・屋敷(6.2)」「家庭(5.7)」「安心出来る所(5.7)」「休む所(4.7)」「寝る所(3.6)」「だんらん(3.1)」「食べる所(2.1)」「遊ぶ・勉強する所(1.6)」「ネコ・家畜(1.0)」「付き合い(1.0)」「環境(1.0)」となる。重みづけとは、各設問並びに世代毎の累積反応頻度数で各カテゴリーの累積反応頻度数を除し、それに100を相乗したものを「重み(比重)」として指標としている。

この分析方法で松代町全体と世代(成長段階)別とに、それぞれイメージ構成をみることにする。Q.6については省略する。

3. 町全体と世代(成長段階)別にみたイメージ

3-1 松代町の住環境のイメージ

(1) 〈いえ＝すまい〉のイメージ

〈いえ＝すまい〉の言葉のもつ一般的なイメージは、「家族」や「家族関係」、「家族行為」や「生活」という家族生活にかかわるイメージと「心象」として心情・心的なものにかかわるイメージとしてとらえられている。「家・屋敷」という物的なものとしてのイメージは比較的弱いといえる。

(2) 〈いえ＝すまい〉を「取りかこむもの」のイメージ

21のカテゴリーにわけられる。いえ＝すまいを取りかこむ具体的な環境イメージまたは認知の構造は、第1に「家」という人工的環境によってかこまれ、第2に「畑」「田」という人為的環境によって、第3に「山」「自然」に代表される自然的環境によって取りかこまれるという、3相の骨格的イメージ構造を示す。

(3) 〈いえ＝すまい〉への関心事

8のカテゴリーにわけられる。関心の対象として「家全体の快・不快適性」、「環境立地条件の善悪」、さらに家

屋の「構造」と「部屋」とにかかわる事に関心を示す。

快適とは「静か」〈涼しい、風通し〉〈日当たり〉〈家の広さ〉等で、不快とは「暑い・風通しの悪さ」〈車の騒音〉〈日当たりの悪さ〉〈家の広すぎ〉等のことで、いえ＝すまいの評価尺度に快・不快という共通の目がある。環境立地条件の善さとして「自然が豊富」〈ごみごみしてない〉〈施設に近い〉等であり、悪い点として「豪雪・多雪」〈交通不便〉にかかわる事項が多い。マイナス面にのみを示す関心事として雪に対する家屋〈構造〉、中門造りの間取りの〈階段まわり〉の矛盾、家の大きさに対して〈部屋の狭さ〉〈部屋数の少なさ〉等である。

(4) 「いえ＝すまい」の理想のイメージ

いえのイメージは10のカテゴリーに、場所＝環境のイメージは14のカテゴリーにそれぞれわけられる。

(4-1) 「いえ＝すまい」の理想のイメージ

「床高の家」のイメージを中心とした「大きい家」「現在の家」「丸木づくりの家」等である。床高とは耐雪、雪処理を考慮した家のイメージであること、ウツディ志向の丸木づくりのイメージがあるのは興味深い。イメージ構成として地域の現実に根づいた手堅いイメージを示す。

(4-2) 理想の場所＝環境のイメージ

「雪のふらない」「自然の多い」「緑が多い」「現在の場所」が主要なイメージとしてあげられている。「雪のふらない」所のイメージが強い反面、自然、緑、現住地という現在地に類似の場所＝環境のイメージを示す。

(5) 居住地環境のイメージ

16のカテゴリーにわけられる。「人間関係」「シンボル」「人間」「部落、町の誇り、自慢」「雪」にかかわるイメージが上位の5つである。人間関係では「皆んなの協力、助け合い、まとまりのよさ、親密な付き合いと友達関係、人情味と厚さ」等のイメージであり、シンボルとは、〈城山、松茸神社、祭り、ブナ林の新緑〉等具体的な地区の象徴となるものをイメージとしてあげている。人間では、人の「過疎化、若者の減少」〈人間の善さ〉〈暮しの姿〉等にかかわるイメージである。カテゴリーが16となるほど、イメージの対象となる要素が豊富な居住地環境であることを示す。

3-2 世代（成長段階）別にみた住環境のイメージ

(1) 「いえ＝すまい」のイメージ

① 小学生

「住む所」としてのイメージを軸にして、「家族」「家・屋敷」「寝る所」「遊ぶ・勉強する所」が同じ比重を占める。「いえ＝すまい」という言葉から、住む所をはじめとして、さらに身辺的、直接的な寝る、遊ぶ、勉強するなど、自己の特定な部分空間のイメージとして、「いえ＝すまい」がとらえられている。

② 中学生

心的なもの、心情ともいえる家の「心象」としてのイメージと、「家族行為」「家族」「家族関係」など家族の生活にかかわるイメージとが主要な対象としてとらえられている。若干抽象化された家の心的なイメージと他方家族という具象的な社会的小集団の様態のイメージという多面的な、あるいは複雑なとらえかたを示している。

③ 高校生

「いえ＝すまい」という言葉に即「家族」のイメージで対応するほど「家族」「家族関係」のイメージがその過半の比重を占める。この2つに集約されるほど明確なとらえかたを示すほど単純化されている。

④ 青年

「家族」に代表されるイメージ、他方「生活する所」「安心できる所」「心象」で上位を占め、家族と個人（自分）にかかわるイメージとしてとらえている。特に生活と安心の場というイメージと意識は、当町の青年層が既に社会人として認知された位置と存在にあることとの関連で注目される。

⑤ 壮年

「家族関係」を第1に、「家族」「心象」のイメージ、さらに「家族行為」をはじめ「休む所」「だんらんの間」「食べる所」とイメージの対象が家族生活を中心に拡大している。世帯主、家族経営の立場を最もよく示すイメージ展開がみられる。

⑥ 老年

「家族関係」「家・屋敷」にかかわるイメージを最も顕著に示す。それにさらに「心象」「生活」のイメージが加わる。次代への家族・家屋の継承・相続をかかえる世代であるためか、家族関係と家・屋敷にかかわるイメージが著るしい。

(2) 「いえ＝すまい」を「取りかこむもの」のイメージ
各世代とも固有の認識を示す。ここでは「いえ＝すまい」を取りかこむものを重みづけをもとに図式的に整理すると次のように3～4相状の構成となる。○印は「いえ＝すまい」

① 小学生

○>「家」>「田」「山」>「道路」「緑」「雪」

② 中学生

○>「田」「山」>「家」「自然」>「畑」「森林」>「造作物」「土・草・花」「空気」「緑」

③ 高校生

○>「自然」>「家」「田」>「木」「山」>「畑」「川・水」

④ 青年

○>「家」「雪」>「友達」>「車」「木」「自然」

⑤ 壮年

○>「畑」「山」>「家」「田」「道路」「木」「森林」

⑥ 老年

○>「畑」>「造作物」>「家」>「道路」>「田」

(3) <いえ=すまい>への関心事

① 小学生

「部屋」にかかわる関心（プラス面）と家の「不快適性」、「家屋構造」「部屋」に対する関心（マイナス面）が強い。部屋と家屋構造への関心が特長である。

② 中学生

家の「快適性」「環境立地条件」にかかわる関心（プラス面）、「部屋」家の「不快適性」「環境立地条件」などの関心（マイナス面）。家全体としてもつ快・不快や環境立地の善し悪しに対し敏感な関心を示す。

③ 高校生

「環境立地条件」「快適性」「家族・家庭」などへ関心（プラス面）、「環境立地条件」「家族・家庭」への関心（マイナス面）。特に環境立地にはプラスマイナス両面とも強い関心を示し、さらに家族や家庭の円満度合への関心が加わる。

④ 青年

家の「快適性」「設備・器具」「家族・家庭」への関心（プラス面）、「家屋構造」「不快適性」への関心（マイナス面）。家全体の快・不快、家の構造や造作、設備器具などへの関心が鋭く、かつ家族生活への関心も併せて示す。

⑤ 壮年

「環境立地条件」「快適性」への関心（プラス面）、「家屋構造」「不快適性」にかかわる関心（マイナス面）。環境立地では特に地形地盤や空気、水のうまさ、茅葺き屋根のもつ涼しさ、などへ、また家屋の天井の低さや階段まわりの不合理等、日常の生活感覚にもとづく具体的な事柄に関心を示す。

⑥ 老年

家のもつ「快・不快適性」（プラス・マイナス両面）、「環境立地条件」（プラス・マイナス両面）、「家屋構造」（マイナス面）などへの関心。家の快・不快のうち特に静かさや騒音、日当りに敏感さを示し、環境立地では、施設と交通の便利さや見晴しなどへの関心が高い。また伝統的な家屋に対しては豪雪時の雪処理上の不安の点で特別な関心を示す。

(4) <いえ=すまい>の理想のイメージ

(4-1) <いえ=すまい>の理想のイメージ

① 小学生

「コンクリートの家」「高い家」に代表される新奇なものや大規模な家のイメージを示す。

② 中学生

「丸木づくりの家」「小さくて凝った家」に代表されるイメージであり、個性的で夢のあるイメージを示す。

③ 高校生

「大きい家」「部屋数のある家」「普通の家」「現在のよ

うな家」とイメージが多様にわかれ、イメージする内容

は、家の大きさや部屋数、普通の、そして現在のもの、と非常に現実感の反映したイメージを示す。

④ 青年

「床高の家」「丸木のペンション風」に代表されるイメージで、雪に対応する家のイメージとウツディハウスのようなロマン的なイメージを示す。

⑤ 壮年

「床高の家」がほとんど占める。耐雪と雪処理という冬の現実に対する実践的なイメージを示す。

⑥ 老年

「床高の家」「現在のよな家」「小じんまりとした家」に集約される。雪処理の楽な家をイメージする一方、現在の家あるいは老年に適したコンパクトな家のイメージを示す。

(4-2) 理想の場所＝環境のイメージ

① 小学生

「緑」が多く「静か」で「広い」環境、場合によっては「山の上」でもというイメージ。

② 中学生

「緑」と「自然」に恵まれ、「静か」で「空気のきれい」な環境、出来れば交通、施設に便利な所というイメージ。

③ 高校生

「自然」と「緑」が多く、かつ「雪がない」「交通便利」な環境のイメージ。

④ 青年

「雪が降らない」で「自然」が豊富な「季節感のある」ゆったりした環境のイメージ。

⑤ 壮年

「現在住んでいるよな所」で「雪が降らない」環境、場合によっては「山の中」でもよいというイメージ。

⑥ 老年

「現在住んでいるよな所」で「交通便利」な「雪の降らない」環境というイメージ。

(5) 居住地環境のイメージ

① 小学生

「雪」のイメージを代表に、「山」「田舎」「部落・町の誇り・自慢」「人間」「人間関係」にかかわるイメージを示す。

② 中学生

各種の「シンボル」「田舎」のイメージを代表にして、「自然」「山」「心象」にかかわるイメージを示す。

③ 高校生

「自然」のイメージを代表に、「シンボル」「人間」「心象」「山」「快適さ」にかかわるイメージを示す。

④ 青年

「雪」のイメージを代表に、「人間関係」「人間」「シンボル」にかかわるイメージを示す。

⑤ 壮年

「人間関係」のイメージを代表に、「人間」「シンボル」「部落・町の誇り・自慢」「雪」にかかわるイメージを示す。

⑥ 老年

「人間関係」のイメージを代表に、「部落・町の誇り・自慢」「人間」「暮し、住み心地」「施設環境」「道路交通」にかかわるイメージを示す。(寺門征男)

3章 家のイメージと拠点性の階層性

一年齢・家族内の役割から一

はじめに

本章は、豪雪農山村集落に暮らす人びとが、「家」にたいしてどのようなイメージを持っているのかを、「家」「身近な地域」「取り囲んでいるもの」の三語から想起されることば(反応語)の採取、比較、分析から識ることを目的としている。また、生活者の拠点意識を「らくらくする・ほっとする場や時」としてとらえ、そのなかにおける位置付けから、「家」の拠点性の分析をおこなった。更に、このような作業から得られた「家」のイメージや拠点性の認識を、年齢・家族内の役割ごとに検討し、その形成要因を探ることをこころみた。

調査対象者は、新潟県南魚沼郡塩沢町、石打・関山地区に住む39名、その性別・該当階層は表3-1に示す通りである。調査は全てヒヤリングとし、昭和58年8月7日～13日、17日～20日の9日間に実施した。

表3-1 調査対象者

階層区分	該当年齢	男子	女子	計
I 小学生	9～11	2	2	4
II 中・高校生	12～17	3	5	8
III 単身青年	18～29	1	1	2
IV 主人	30～47	8		8
V 主婦	29～46		9	9
VI 年寄り	58～71	3	5	8
計		17	22	39

1. 「家」のイメージ

「家」という語から想起された反応語は69、一人平均1.76である。それを出現頻度の高いものから示したのが表3-2で、(家族)の度数が際立って高いことが分る。その他、(やすらぎ)(屋根)(自分の家)などが主だった反応語である。

このうち(屋根)ということばの語られ方には、「良い家とか悪い家との格差は、屋根にあらわれる」などと、「家」の格を象徴するものとしての意識がみられる。また、(変化)は「今は恵まれている」「増改築で良くなっ

表3-2 「家」から得られた反応語

度数	重み	反応語	読み替えた内容
14	20.2	家族	
6	8.7	くつろぎ	過ごしやすい/何でも気軽にできるくつろぎの場/安らぎ/みんなが仲良くする姿
5	7.2	自分のいえ 屋根 民宿	自分の住んでいる家/自分の住んでいる家の形/我家/自分の部屋 萱ぶき屋根2/くず屋から萱屋根への変化/木羽屋根から雨漏しない屋根への移り変わり/平らな屋根 旅館2
3	4.3	建物 人間集団 変化 財産	牛豚鳥を飼っている昔の家/みた目のはでさ 連帯責任をもった集団/大家族集団/小さい社会集団 増改築で良くなった/民宿向けに変わった/今は恵まれている 先祖の作った身代を減らさない/金がない
2	2.9	雪 親類 先祖 生活 しつらえ	雪に対する対策 冬囲い/雪囲い
1	1.4	玄関 取り つくり かたち 量 仕事 農作業 地域 人客 子孫 プライバシー	家の広い間取り 丈夫なつくり 平屋 家を守るためには子孫を増やす 昔は家のなかにプライバシーがなかった
69	100	計	

た」など、肯定的にとらえられる傾向が強い。その他、(民宿)(仕事)(農作業)などの仕事に関する反応語も比較的多い。

これらの結果から、「家」イメージの主要な要素を整理したものが、以下である。

- ① 家族を軸とした人間あるいはその集団で、時代を超えて先祖までがふくまれる
- ② やすらぎなど、肯定的な人間関係及びそれにより得られる安定感
- ③ 建物としての空間やその性能、あるいは形態で、多くは屋根に象徴される
- ④ 自分のいえとしての所属・帰属感
- ⑤ 民宿・旅館などの仕事またはその場
- ⑥ 時間系にもとづく変化またはその様態

次に、「身近な地域」から得られることばを見ると、(地

名) (スキー場) が度数16,12で際立って多く、その他、
(田・畑) (山) (農作業) (変化) が主な反応語である。
(表3-3)

この「身近な地域」と「家」から得られた反応語を重ねあわせてみたものが、図1であり、[建物]分類が「家」にだけ現れることがわかる。「身近な地域」の中にも空間の広がり示す[地理]分類があるが、そこで語られている範囲は遙かに広く、そこには「家」のイメージは及ばない。

これにより「家」の空間範囲は、建物の外面で明確な区分がなされ、それに適時取り付けられる装置を含みそれ以内の空間であることが明らかとなる。

また、共通にみられる分類の中にも、反応語のレベルでみるとかなり大きな相違を含むものがある。その代表的な例が[人間]である。(家族) (親類) (人間関係) では共通しているものの、「家」には(先祖・子孫)が含ま

表3-3 「身近な地域」から得られた反応語

度数	重み	反応語	読み替えた内容
16	20.0	地名	古城/上野/関山2/関山村/石打2/石打村2/塩沢2/六日町4/湯沢/
12	15.0	スキー場	スキー場が多い
5	6.3	田・畑	
4	5.0	山	山の近く
		農作業	農業/稲作/米/一町歩80俵の米づくり
		変化	農村のイメージから変わった/今は楽になった/安定性がなくなった/苦勞から立ちあがる気力が今はなくなってきた
3	3.8	スキー	
2	2.5	自然	自然がある/自然が良い
		雪	雪がたくさん降る
		区域	中学校区/この盆地
		交通	交通の便/雑踏
		スキー観光	村づくり/町づくり
		地域づくり	地域の寄り合い
		寄り合い	人間の交わり/近所の人と顔を合わせられない
		人	
		田舎	
		故郷	
		方言	特有の方言/実家のある所との言葉の違い
1	1.3	川	
		家系	伝統のある家系
		地域	自分の地域という発想
		家族	
		親類	
		友達	
		むつまじい	
		山村	
		遅れている	
80	100	計	

れる。それに対して「身近な地域」には、このような時系列にのった人間集団は見られず、代わって(友達)という血縁以外の人間がイメージのなかに強く現れてくる。

また、(やすらぎ) (プライバシー) などの濃密な、しかも肯定的なニュアンスをもつ人間関係は、「家」に限って見られる要素である。

このような「身近な地域」と「家」のイメージの相違から、「家」イメージの外縁を規定したものが以下である。

- ① 空間的には、建物の外面およびそれに取り付けられた装置より内側
- ② 人間の集団としては血縁で繋がった集団で、時系列をも有する集団
- ③ 人間関係では、濃密なしかも肯定的なかかわり

次に、「取り囲まれているもの」のイメージをみると、「取り囲まれているもの」という語から想起された反応語は81語で、一人あたり2.1語にあたる。このうち最も度数の高い語は(友人)の8、(仕事) (家族) がそれぞれ度数7と6で、これらが主な反応語といえる。(表3-4)

表3-4 「取り囲まれているもの」から得られた反応語

度数	重み	反応語	読み替えた内容
9	11.1	友人	友人の励まし/親しい人
7	8.6	仕事	店の手伝い/つとめ
6	7.4	家族	
4	4.9	地域社会	
		お客	
		スキー	
3	3.7	親子	親の干渉2/親の小言
		時間	自分だけの時間/部活の時間/スキーシーズン
2	2.5	田・畑	
		山	山やま
		雪	
		家	食事の準備
		家事	地域での自分の役目
		地域の役目	
		孫	
		親類	
		家庭生活	
		自由	勤め人と違う自由
1	1.2	緑	
		農作業	百姓仕事
		行事	地域の行事
		兄弟	
		先祖	
		生活	
		立場	姑としての立場
		規則	学校の規則
		義理・人情	
		世界	自分だけの世界
		借金	
81	100	計	

この「取り囲まれているもの」から想起されるイメージは、主体に最も近い領域をあらわすと考えていたが、実際には、一部に「身近な地域」で示された内容と重なるほどの大きな広がりが見られる。しかしその反面、(自由)や(自分だけの世界)など、主体の存在そのものを示す抽象的な概念をも含んでおり、初めに仮定した主体に最も近い意識領域も並せ示されているといえよう。

このような前提で「取り囲まれているもの」「家」から得られた反応語を重ねてみると、反応語のレベルに相違が見られる。(図1)「取り囲まれているもの」では[人間]分類が(親)(兄弟)(孫)(子ども)など、家族構成員が個々に出されているのに対して、「家」ではそれは(家族)という反応語に集約される。これは、「取り囲むもの」では、家族の一人一人、あるいは個々とのつながりがイメージされるのに対して、「家」ではむしろ集団性が強く意識された結果と考えられる。

このような「取り囲まれているもの」との比較から明らかな「家」のイメージの内縁は、次の点である。

家族に関しては、個々の構成員ではなく、その集団あるいは集団性

以上の結果を総合して、現在、石打に住む人びとの「家」のイメージを整理したものが、以下である。

- ① 「家」イメージを形成する最も大きな要素は、家族である。それは、一人一人の構成員を示すのではなく、家族という言葉であらわされる集団あるいは集団性である。これは先祖・子孫など時系的に拡大されたものも含む
- ② 親類などの同じ建物に居住しない、しかし血縁では繋がった人びとにまで、「家」のイメージは広がる。このような集団内での人間関係様態は、やすらぎあるいはプライバシーとして意識される、きわめて濃密な関係であり、望ましいものとしての評価をもつ。
- ③ 空間的には、居住する建物の外面で明確な境界区分をもつ。雪囲いなどの、季節的に取り付けられる建物外面の装置を含み、それよりも内側が「家」空間である。
- ④ その空間を形態的に象徴するのが屋根である。この

屋根に対する意識は比較的強く、しかもそれは「家」の格式・権威などを象徴するものとも捉えられている。

⑤ 増改築などによる変化も、「家」イメージを形成する一つの要素となっている。

⑥ 農作業や民宿ということばで示された、仕事あるいはその場としての要素もみられる。

2. 「家」の拠点性

解放度の高い時間と空間である拠点意識を問う「ほっとする・らくらくする」場に対する具体的回答は33、場所は別に問わないとするもの3例、不明は7例であった。回答のうち最も多いのは(自分の部屋)の12例で、(家)の5例(茶の間)の4例に比べその拠点性の高さが際立っている。

これを、個人専有度の違いや屋内・外別に分類したものが表3-5である。建物の内・外別では、内部を「拠点」としているものが大半を占め、拠点を建物外部とするものは僅か3例にしかすぎない。しかし、「家」建物内部を「拠点」としている場合にも、(家)あるいは(家の中)と答えた「家」の空間全体を拠点とするものは7例と少なく、2/3以上はその一部が拠点化されているに過ぎない。

しかも、そのうち(茶の間)や(居間)(食堂)などの共用性の高い場を拠点と意識している9例と、主体の専有性の極めて高い場に限って拠点意識を感じている14例とでは、「家」に対する意識は異なっている。

「家」のイメージ分析で明かなように、家族集団やいこい・だんらんといった人間関係は、「家」の主要な要因であり、前者はこのような濃密な人間関係の展開する場を拠点としている以上、その拠点意識は「家」全体にまで拡大される可能性を強く含んでいる。それに対して、(自分の部屋)という個人の専有度の高い空間に限って

表3-5 「らくらくする場」の内容

建物の内・外	度数	場 所	度数	言い換えた内容
「家」建物の外	3	学校の校門	1	
		飲 み や	1	
		庭	1	
「家」建物の内	30	家	5	
		家 の 中	2	
		食 堂	3	食事する所
		居 間	2	
		茶 の 間	4	
		寝 室	2	
		自分の部屋	12	
小 計	33	小 計	33	
場は問わず	3			
不 明	7			
計	43			

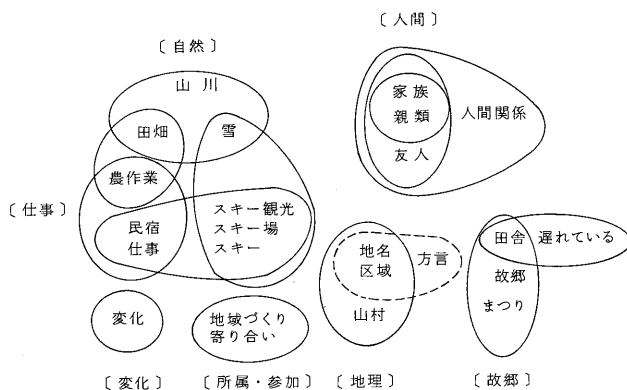


図1 「身近な地域」の反応語の分類

の拠点意識は、むしろ他の空間を緊張空間ととらえた結果ともいえる。

以上、「家」に関しての拠点性を分類すると、次の四タイプとして考えることができる。

- ① 「家」の建物全体が拠点として意識されている型（7人/33人）
- ② 「家」の共用部分が拠点として意識されている（9人/33人）
- ③ 個人の専用室が拠点として意識され、その他の「家」の建物内部の空間は、緊張空間である型（14人/33人）
- ④ 「家」の建物全体が緊張空間として意識され、それ以外の空間が拠点である型（3人/33人）

3. 「家」のイメージ・拠点性みる階層性

これまでみてきた「家」のイメージあるいは拠点性を、年齢階層や家族内の役割りごとに整理し、その相違性・共通性を分析する。

- 1) 自己の行動（場）そのものが「拠点」=「家」として扱えられる小学生

小学生4人のあげた「拠点」や「家」のイメージは、個人差が大きく、明確なたちでの世代傾向を知ることにはできないが、その中から、あえて特徴をあげるならば、「家」と「拠点」とのはっきりとした分離意識がないことを指摘することができる。また、「拠点」イメージのなかに、他の世代のような「何かから解放される」といった明確な緊張対象がなく、自分の行動そのものが「らくらくする」要因であるという点では、きわめて実存的でもある。

- 2) 勉強や学校を対立概念として「家」を拠点化する中学・高校生

この世代の子どもたち8人の「家」イメージには、（自分の家・部屋）2人、（家族）2人、（なんでも気楽にできるところ）（くつろぐ場所）など、くつろぎの場あるいは帰属対象としての意識が強くみられる。

また「拠点」イメージには、（自分の部屋）2人、（家）あるいは（家の玄関）2人があげられている。それを「らくらくする」時と重ねると、「勉強の合間に本を読んでいる時」「学校から帰ってきた時」「勉強が終わった時」「部活を終わって学校を離れる時」など、その対象は全て学校あるいは勉強に関連し、しかもそれらは明確な緊張対象として意識されている。

つまり、この世代にとって「家」とは、勉強や学校という緊張対象から解放される場、すなわち拠点として位置付けられていることがわかる。

- 3) 親を対立的に、「家」を緊張空間として把える若年層
この世代はサンプル数が2と少ないが、いずれも拠点を「自分の部屋」とし、家のイメージを「親」あるいは「家族」としている点に大きな共通性がみられる。しか

も、「取り囲まれるもの」には（親の干渉）（親の小言）がみられ、彼らの拠点イメージが親を対立概念として、それから解放される場すなわち（自分の部屋）が拠点化されていることを読み取ることができる。

- 4) 「家」の格を意識する主人層

この階層8人の「家」イメージには、（屋根）の移り変わりが3人、（家族）が2人、その他（先祖）（集団）があげられている。このうち（屋根）に与えられた重みは、他の階層に比べ際立って高く、主人層の特徴はまさにこの（屋根）にあるといっても過言ではない。この語のとりえかたには、先に述べた権威や格式の象徴とする見方が色濃くみられる。

また、（昔はプライバシーがなかった）（先祖）などの反応語にみられる時系性は、この階層と年寄り階層にだけ現れる特徴でもある。更に、この階層には、他の世代に強く現れる、（家族）（だんらん）などの人的要素や、内部空間に関するイメージは殆どみられない。

これらを総合してみると、この階層の人びとは「家」を独自の価値や時系を有する、一つの体系だったものとして、客観的にとらえていると考えることができる。

また、拠点イメージについては、仕事から解放されるの拠点であり、仕事を明確な緊張対象としてとらえている点に共通性がある。それを場としてみると、恒常的に外勤をおこなっている人は（居間）や（家）を、民宿など家のなかに生業がはいるこんでいる人は（自分の部屋）や（飲みや）をあげる。つまり、この階層の人びとにとっては、仕事から解放される場が拠点であり、「家」が拠点化されるか否かは、仕事の間との相対的な関係の中で定められているといえよう。

- 5) 家族を「家」の主要イメージとする主婦層

一家の主婦の立場にある9人の「家」イメージは、（家族）6人、（旅館・民宿）（だんらん・やすらぎ）各2人で、家族あるいはその関係に対する重みは、他の階層に比べて特に強い。同じ世代にある主人層の「家」イメージが、客体としての「家」を外的に把えるのに比べると、この階層は、人的あるいは要素的にとらえる傾向が強く、内的な「家」の把えかたである。

拠点については、例外なく「自分の部屋」が挙げられるという大きな特徴がある。「らくらくする・ほっとする時」についても「一日の家事や仕事が終わって寝る時」7人、「スキーシーズが終わった時」2人など、主婦あるいは民宿の担手としての労働から解放されたときである。これら主婦にとっても仕事意識は強く、主人層が仕事の間との相対的な関係で拠点を「家」の外・内に求めたように、彼女らも、労働の場から離れた空間を拠点とする。ただし、この階層は「家」が仕事あるいはその場のイメージと重なり、拠点を築くにも「家」の外へと飛び出すのではなく、内部にと籠もってゆくという点に特徴

がある。

6) 過去の「家」イメージを規準にもつ年寄り階層

この階層の家についてのイメージは、(今は良くなった)(民宿向けに変わった)など変化をあげる人が半数の4人、(先祖)(家族)各2人(昔の萱屋根の家)(農業)などがあげられている。

このうち(変化)や(先祖)(萱屋根の家)などの、時系性をもった「家」に対するイメージは、この階層の大きな特徴といえようが、そのいずれもは、過去から現在までの変化や変化様態を示すものである。

地域についても同様で(安定感がなくなった)(今は楽になった)など地域の変化をあげるのが2例、(石打村・関山村)など旧町村単位を示すもの3人と、半数以上は過去からの視点をその内に強く含んでいる。

この世代の「家」および「地域」のイメージは、過去のある時点で築かれたイメージを基準とし、それをそのまま内在化させているか、それと現状との差異を顕在化させたものといえよう。

「拠点」イメージについては、「茶の間・居間で食事をしたり茶を飲んだり、孫と話しをしたりする時」4人と「田植や稲刈りが終わった時」4人に二分され、前者は60歳台以上の人、後者は50歳台の人と、年齢によってほぼ類型化される。他の世代・階層に比べ、家に空間拠点を持つ割合が高く、しかも、それは自分の部屋ではなく「茶の間・居間」といった共有空間を自己領域化している点に特徴がある。

以上、ことばをてがかりに分析してきた結果は、年齢あるいは家族内での役割によって「家」のイメージや拠点性が大きく異なっていることを明確に示している。

「家」イメージに限っていえば、第Ⅱ階層と第Ⅴ階層では、概ね似通ったイメージを抱いているといえようし、家族が主要素であるという点に着目するならば、これに第Ⅲ階層を加えることができよう。雑駁な言い方をすれば、子供と母親は「家」についてはほぼイメージが共有されているとでもいえようか。

しかし、第Ⅳ階層の主人層と、第Ⅵ階層の年寄り層の抱く「家」イメージは、極めて独自性の高いもので、他の階層とは異質だといわなければならない。この二つの階層に属する人びとは、こと「家」に関しては他の家族とイメージを共有することの出来ない人びとといえようか。

一方の拠点性の認識については、階層差が極めて大きく、むしろ家族成員の一人一人が「家」に対して異なった拠点性を持ちつつ、一つ屋根の下で暮らしている状態といえよう。

このようなイメージや拠点性の違いが、実生活の上で、どのような影響をあたえているのか、あるいは、家族という枠組のなかでどのように昇華されているのかは、今

回の調査からは残念ながら伺い識ることはできない。それは今後の課題として残し、ここでは「家」のイメージあるいは拠点性認識の形成過程に、年齢や家族内の役割が強くかわかることを明らかにし、そのかわりの構図をスケッチしたことを成果としたい。(梶島邦江)

4章 老壮年層の住居イメージと空間利用

―住み方にみるイメージの投影―

1. 六郷地区の概況

米沢市六郷地区は、昭和29年10月に米沢市に合併した旧村である。総人口は1400人(昭和55年国調)を数える。東は米沢市窪田地区(昭和29年11月合併)、西は同広幡地区(同29年10月合併)、そして南は最上川上流の鬼面川^{すもの}をはさんで同塩井地区(同29年10月)と接する逆三角形の地形で、面積5.3KM²を有している。米沢市中心市街地からは直線距離で4 KMであり、通勤、通学、買物などを通じて、地区の人々の生活は密接な関係をこの中心部と保っているが、宅地化などの影響はみられない。

歴史は古い。江戸期以前、中世期には集落の形成や土地利用が既に一定の段階に達していた。

2. 調査の方法

調査は2つの段階を経て行なわれた。第一段階は予備調査的な意味合いも持ったアンケート調査であり、第二段階は個別の面接ヒアリング調査である。それぞれについて概要をまとめておく。

1) 予備的アンケート調査

次のような項目について地区公民館活動の1つである教育懇談会の場を借り、出席者の自由記入で回答を得た。

〈調査項目〉

- 現在の家(イエ)または住居の良い点、悪い点
- 現在の居住地区の風景や環境の良い点、悪い点

この結果、会合出席者約30名の中から15人の回答を得た。

2) 面接ヒアリング調査

① 対象者

予備段階のアンケートを参考にしつつ、地区内10軒の特に老壮年令の居住者の協力を得て、調査対象とした。

② 調査方法及び調査時期

実際に住宅をみせてもらい、写真撮影及び以下の調査項目について面接ヒアリングを行なった。

調査は2回にわけて行なわれた。第1回のヒアリング結果より各戸の間取り図、敷地内図を作成し、第2回はその2種類の図を提示して、補完的事項を確認した。

③ 内容

面接ヒアリングの内容は、おおむね次のとおりである。

イ 家族構成

- i) 家族員別に続柄、性別、年令、職業あるいは学

校

- ii) ライフ・ステージ（あととりの未既婚による）
- iii) 本人及びあととりの結婚年

ロ 住宅の間取り等

- i) 現在の間取り→図とする
- ii) 現在の間取りの増改築，変更部分及びその理由
- iii) 一部の家具・設備についての所在と購入時期

ハ 住宅の使い方と呼び方

- i) 各部屋の使用目的とその呼び方
- ii) i) についての変更
- iii) 特に各家族員の寝室，全員の居間，家の中心となる部屋の変化と呼び方

ニ 住居のイメージ

- i) 住居をとりかこむものは何か
- ii) 新住宅に希望する条件
- iii) 「家（いえ）」ということばから連想するもの

3. 予備段階のアンケート成果（省略）

4. 使い方と家（イエ）のイメージ

- 1) 一般型（省略）
- 2) 事例の展開

間取り調査を行った10事例について，間取りの形態と，寝室の位置から次のように類型区分した。

Ca……広間型で，茶の間の裏側に寝室のある型（5例）

Cb……広間型で，中の間がある型（1例）

Cc……その他の広間型（2例）

N……従来の広間型を新たに中廊下型へ建て替えた住宅（1例）

H……各部屋が併列に配置された住宅（1例）

事例1，「Ca-1」（図4-1）

S氏は58歳，農業に従事している。彼の代で六郷に住みついてから10代目だという。間取りは広間型，娘夫婦，孫との3世代同居である。

〈部屋の利用〉

各部屋の利用について見ていくと，まずS氏の寝室は茶の間のウラのいわゆるへや，ナンドに相当する部分である。代々世帯主が寝室として使用しているというが，類似の事例は多い。

最も大きな部屋である茶の間は主に接客に使用される。冬の寒さ対策もあって昭和57年には竿縁天井を張った。S氏は「家の中心」をこの茶の間であるといっているが事例の中で広間型住宅（C型）の場合はすべてが同じ答えであった。この茶の間の住生活における役割，意味づけは対象者の住居イメージに密接に関連している。

デイは法事の時以外はほとんど使わない。法事は改めてデイに壇をつくってとり行なうが，その時は二の間と続き間にする。30名程の客数になるという。二の間には

ベッドが置かれているが，それは親類の者が泊りに来た時のみに使用している。なお，デイの呼称はこの事例のみで，デイに相当する部屋は他の事例ではすべて上段と呼ばれている。

居間またはデイドコと呼ばれる部屋はもともとは土間であった。現在の畳敷きにしたのは昭和49年で，天井も同時に張った。それ以前は $\frac{1}{3}$ が土間で，他は板敷であった。家族の団らん，常客の談話の場，そして冬期は食事室としても使用する。夏の食事はゼンプでする。

2階の若い衆の部屋は娘が結婚した昭和49年に増築した。子供の結婚を契機とする模様替えは近年になるほど大規模なものになりつつある。

14畳程のまとまった広がりには若夫婦と子供が居住しており，家族単位での領域性が比較的明らかである。S氏は孫の成長に応じて子供部屋をデイドコのカゲの部屋を改良して作ることを考えている。

S氏の若い頃は居間（デイドコ）のカゲの部屋を居室としていた。トリツギが祖父母の部屋であったこともあるといふ。若い頃はデイドコのカゲの部屋，代替わりして茶の間のウラの部屋，そして隠居するとトリツギの間という家族関係に対応した就寝室の移動が浮かぶのであるが，次の代の若夫婦は既に新たに別室を設けている。なお他の事例（Ca-2，Ca-5，Cc-1，H）では二の間（六畳，中の間）が隠居部屋，老人室になっている。

〈家・イエ観〉

S氏の家・イエ観は「生まれた時から，先祖からあったから維持，管理している」と一見消極的である。事実，使い方については「不便で寒い，改造したい」のだが「経済的に余裕がないので無理」という意見であった。しかし，茶の間，デイ，二の間という先祖から受け継がれてきた部屋は「変えたくない」とのことであった。

以下，事例2～10は省略し，事例中Ca-4，Ca-5，Cb，Cc-1，Cc-2，H，Nについては間取図のみ示す。

< INDEX >

- C …… 夫婦
S …… 単身者
O …… 第1世代
1 …… 第2世代
2 …… 第3世代
3 …… 第4世代
M …… 男性
W …… 女性
() …… 実年齢
⊕ …… 神棚
㊦ …… 仏壇

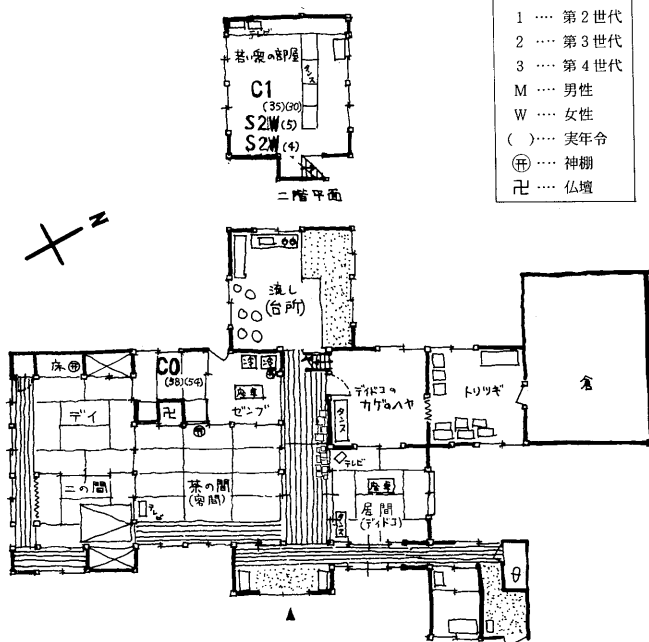


図4-1 「Ca-1」

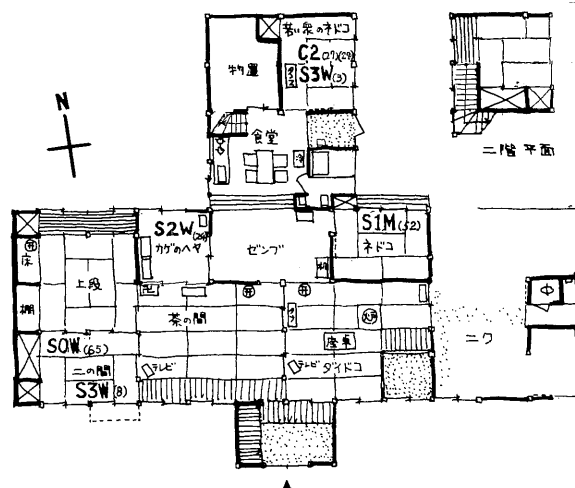


図4-3 「Ca-5」

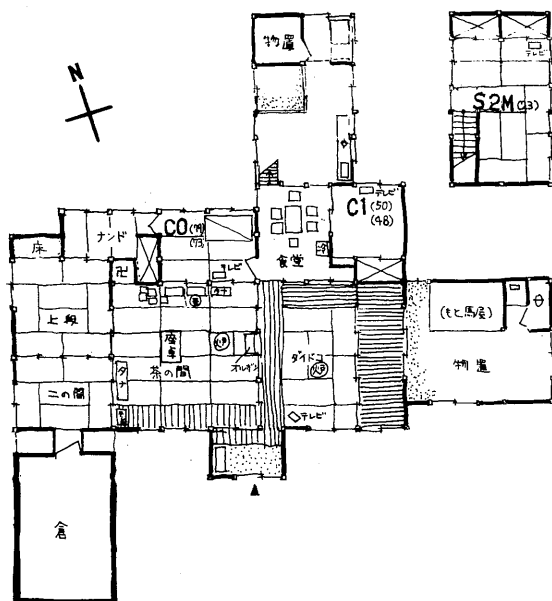


図4-2 「Ca-4」

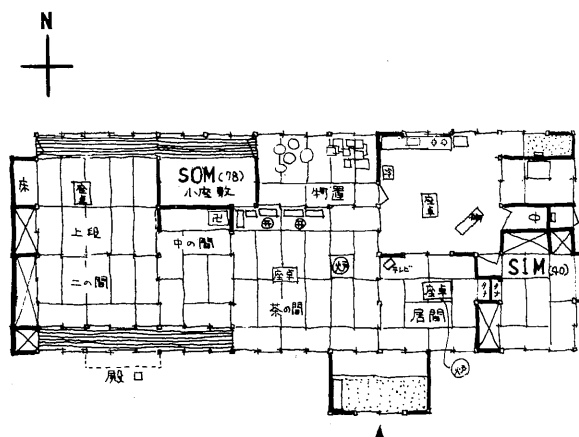


図4-4 「Cb」

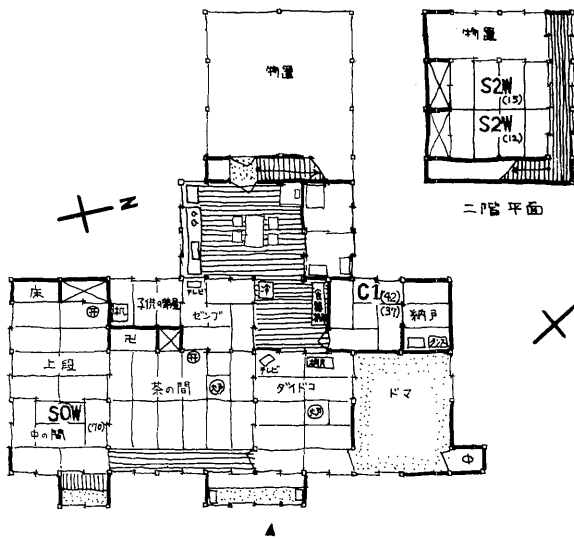


図4-5 「Cc-1」

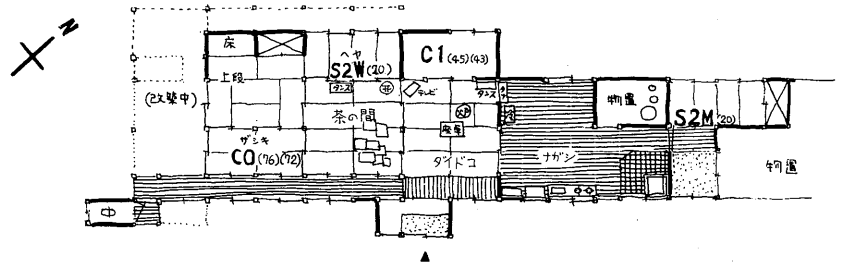


図4-7 「H-1」

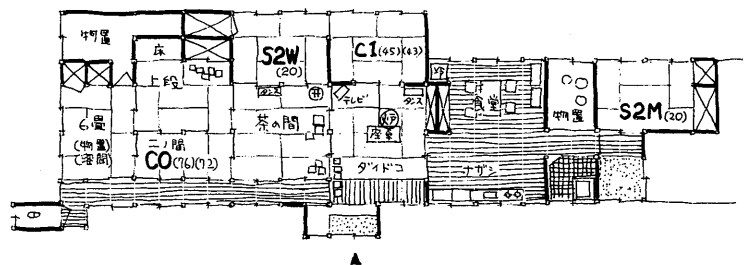


図4-8 「H-2」

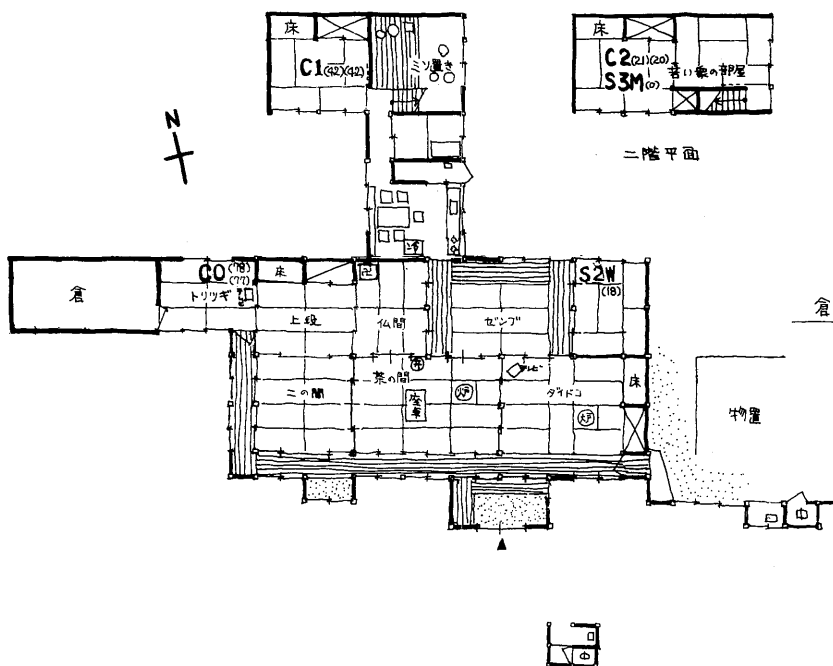


図4-6 「Cc-2」

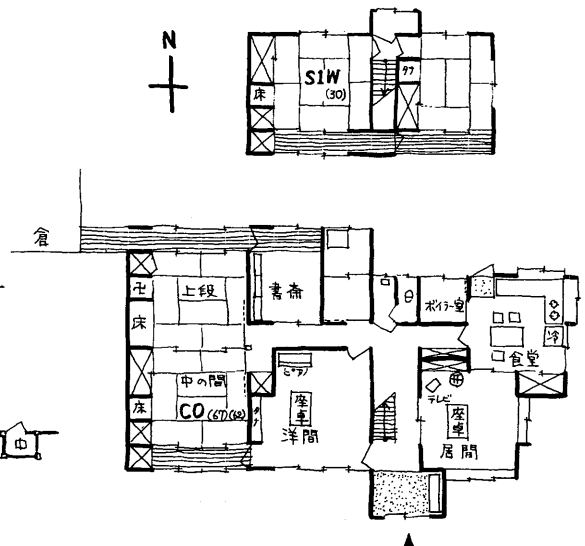


図4-9 「N」

5. まとめ

10の事例の展開の中で個別に取り上げた次の三つの論点について検討する。

1. 寝室の定位性
2. 茶の間の時間—空間的シンボル性
3. 「守るもの」としての家（イエ）意識

1, 2はいずれも住空間構成論としては重要な課題であるが、本研究の主題は3にあるので、本章では3に係わる部分についての概括に止める。

1) 寝室の定位性

寝室は最も個人的な空間である。従って、その位置が住宅全体の間取りの下でどのような関係にあるかを調べることは、当人の住空間イメージ形成の要因を探る有力な方法であろう。

取り上げた事例は、恐らく死去するまで一生をその家で過す人々を対象としている。いいかえると、彼らはある一定の住空間を生活の本拠として、定着し、動かない人々である。更に、中でもC型の事例を見る限りでは、当人と家との関係は当人の世代だけではない。自分の父母、祖父母というように過去とつながり、また子供の代へと未来へもつながることを基本的に容認する特性をもつ。

こうした世代を連続してつなげていくいわば〈世代の継承サイクル〉は、各世代間の一定の家族関係秩序にもとづく寝室の移動によって成立していた。

Ca型とCc型で家主（または世帯主）の寝室の位置は異なるが（図4-10）、いずれも茶の間を中心とした時に、子供部屋は家主の寝室よりは遠い位置に、そして隠居、老人の部屋は茶の間に接する場所にある。例外はCc-2（図4-6）であるが、この場合茶の間周辺の空室化が、近い将来世代継承のサイクルそのものをも変化させることが予想される。

すなわち、当地区においても近代化に伴う住宅内部での個々の生活領域の拡大が、まず寝室の個室化として、さらに個室を確保するための居住空間の拡大として表われている。具体的には明るく間仕切りのしっかりした部屋を求めて、新たに建てるため、次第に住宅の主屋から周辺の別棟へと増築していく傾向が生じつつある。これは今後とも顕在化していくであろう。そうして、個室が使用する者のライフサイクルの大半を受け止めることになれば、従来の寝室の定位性は崩れ、これと対応した世代継承のシステムも変化していくと考えられるのである。

C型以外のH, N型でも二の間が寝室になっている。H型はC型と同様な構成になっているが、これに対してN型は「使いやすさに留意した」（K氏67歳）というように当初から個室的な利用を目的として建てられている。

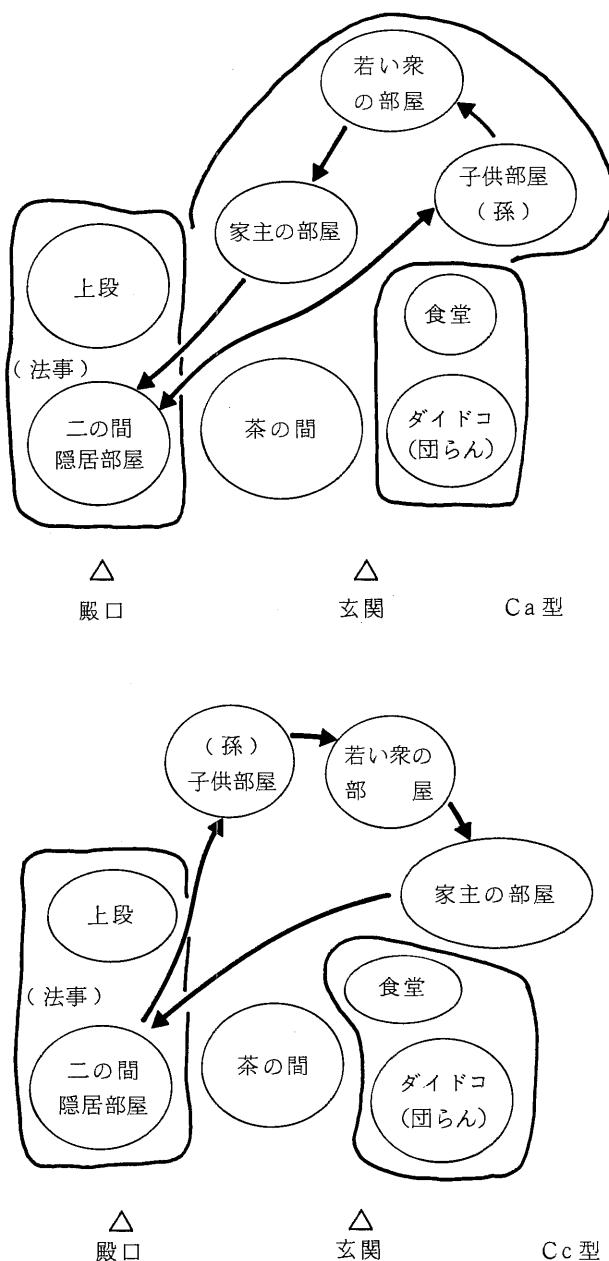


図4-10 寝室の定性性と世代継承サイクル

南側の日当りのよい場所で、しかも廊下から他の部屋を通らず出入りできる部屋の確保については、元教師であるK氏（67歳）が部落の諸活動や伝統、慣習を相対化して合理的に捉えられる立場にあったことに起因する部分が多い。

しかし、こうした寝室の個室化は他の部屋の機能をも固定して個別化していくことになり、K氏のいう「閉鎖的で夏は暑い」内部と周辺とが融和しない空間への変容をも意味している。

2) 茶の間の時間—空間的シンボル性

一般住宅と比べて農家はそもそも部落や近隣と密接な関係をもつことで機能する部分がはるかに多い。そのため人間関係を円滑に維持していけるように、家の社会に

対するいわば構えが重要な意味をもっている。茶の間はまさにその中心であり、持田照夫教授（大阪市大）の指摘する「表示空間」となっている。

「家の中心」はどこか」という問いにNを除いて他のすべての事例が「茶の間」と答え、しかも同様に団らんを中心は別の部屋「ダイドコ」であるというのは、茶の間がシンボリックな意味をもつ空間であることを示している。仏壇や神棚が置かれ贈物や旅行のみやげ、先祖から伝わる掛軸や古い品物が一見無造作に周辺の壁に配置されている空間は他の部屋と比べると大変華かな印象を受ける。また、それらの物量、種類を推し量ることによって部落中での「家の格」（Cc-2, Y氏42歳）が了解できる。さて、事例からはそうした対外的な茶の間のシンボリックに加えて対内的なシンボリックも茶の間の成立に重要な要因となっていることが指摘できよう。それは調査対象者との間で次の事柄について、了解する過程で得られた視点である。

すなわち、同じ部屋の鴨居の上に先祖の遺影が世代を遡り連続して飾られていること、更に、現在の家族のさまざまな社会的役職や部落の委員の任命状、子供の学校での競技会での賞状などが飾られていることなどによ

る。これらは勿論対外的な意味も大いにあるが、と同時に茶の間が過去とつながり、そして未来へと家（イエ）の系譜をつなげることが約束されている空間であることをシンボリックに表示している。「できごとを待っている部屋」（Cc-1, U氏, 42歳）と表現された茶の間は家を流れる時間をいわば〈吸い込む〉場として対内的にシンボリックな質を確保している。それは既述寝室の定位性が、この茶の間を狭む形で成立していることと直接結びつくものと思われる。ちなみに、今後都市において増々需要が増大するであろう二世帯住居、ないしは老人扶養を前提とした住居を考えていく際に、こうした茶の間の持つ時間—空間的シンボリックに改めて注目する必要があるのではないか。茶の間には住空間のある意味で普遍な特性を示唆するものがあるように思える。

3) 「守るもの」としての家（イエ）意識

「家（イエ）、または住居からの連想」については、発言内容をKJ法により分類するとおよそ次の8つのグループに分けられた。

- ① 家族生活の場
- ② 安住の場
- ③ 自然との濃い関係
- ④ 大きい、安全な住宅
- ⑤ 本拠地
- ⑥ 部落と一体化
- ⑦ 格式
- ⑧ 守っていくもの

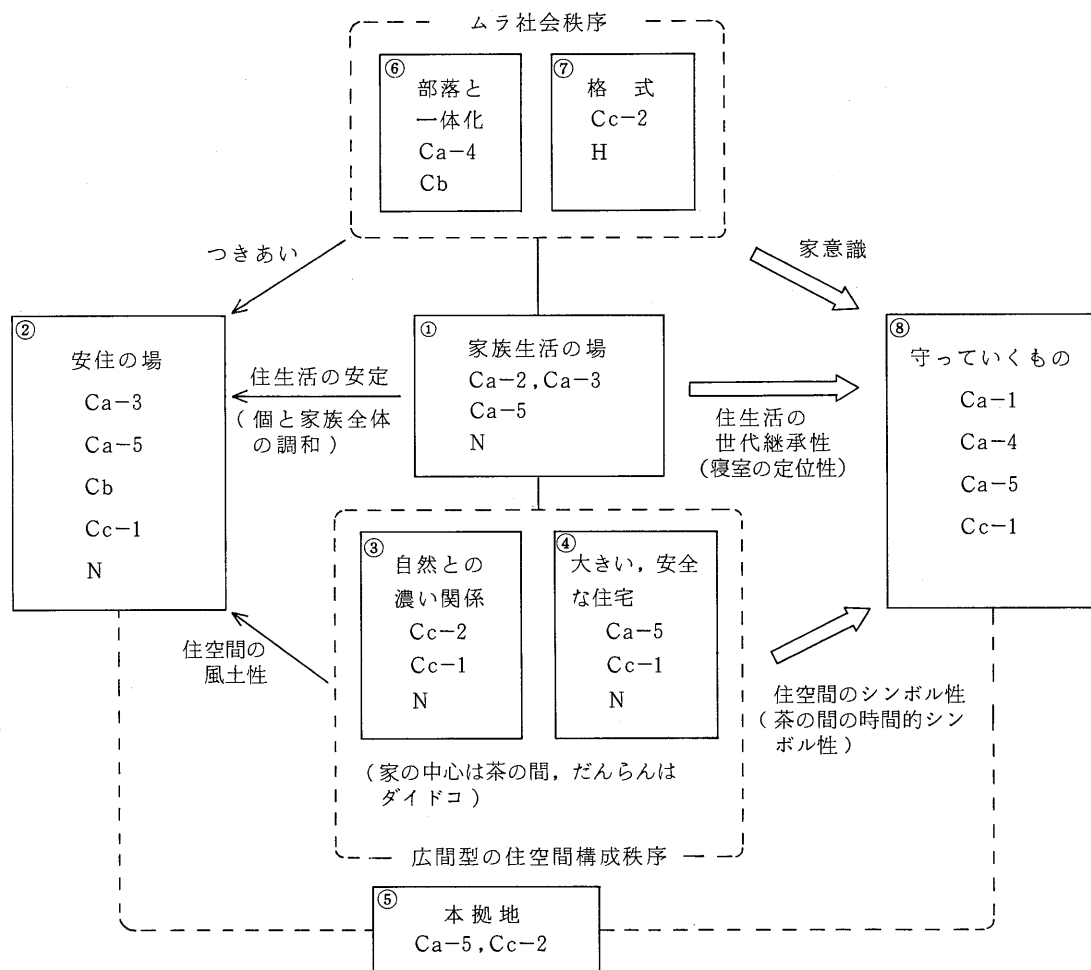


図4-11 「家」「イエ」から連想される言葉の構造的関連

- ④ 大きさと安全性
- ⑤ 本拠地
- ⑥ 部落との一体化
- ⑦ 格式
- ⑧ 守っていくもの

注目されるのはこの「守っていくもの」という発言である。そこには家庭運営の責任者としての姿勢もさることながら、受け継いだ家産を少くとも自分の代は維持していきたい、そして家の歴史の中で与えられた自分の役割は果さねばならないとする保守的な姿勢が窺える。なおこうした姿勢は農地の所有観にも共通に見られる。(各対象者ごとに数時間のヒヤリングを行なっているので単に言葉のみでからでは窺えない部分も考察に加えている。)

以上の①～⑧を図式化したのが図4-11である。直接的生活行為からイメージされるものが、「①家族生活の場」、③と④を合わせた物的に表現される「住空間の構成秩序」、そして⑥⑦を合わせた「ムラ社会秩序」である。さらに、こうした関係の夫々が複合化されたイメージが「②安住の場」であり、また「⑧守っていくもの」である。夫々に構造化につながる要因を考えたが、特に⑧につながる部分についていうと、まず「ムラ社会秩序」との関係では何々家といった家人性、イエ意識が関連している。次いで「①家族生活」との関連では世代の継承性が大きな要因となっている。この継承性はすでに述べたように寝室の定位性に対応している。そして物的な「住空間構成秩序」については③、④との直接的な関係はないが、既述した家(イエ)の中心としての茶の間の位置づけなどから茶の間のもつ時間—空間的シンボル性が挙げられよう。

本章の分担は特に老壮年令の家主(あるいは世帯主)が住居の使用、住生活を通してどのような住イメージを抱いているからであった。その結果、家(イエ)から連想される「守っていくもの」という意識に着目することになった。さらに「守っていくもの」について構造的な要因についても検討を加えた。(藤井敏信、調査協力・合田素行 宮城道子)

〈研究組織〉

- | | | |
|-----|-------|---------------|
| 主 査 | 寺門 征男 | 千葉大学助教授 |
| 委 員 | 小澤紀美子 | 東京学芸大学助教授 |
| | 渡辺 彩子 | 上越教育大学助教授 |
| | 藤井 敏信 | 十文字女子短期大学助教授 |
| | 梶島 邦江 | 早稲田大学大学院博士課程 |
| | 佐伯とよ子 | 文京区立第四中学校教諭 |
| 協力員 | 野村 緑子 | 東京学芸大学大学院修士課程 |